

「資本論」第3部第1稿について：オリジナルの調査にもとづいて

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

50

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

89

(終了ページ / End Page)

158

(発行年 / Year)

1982-10-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008437>

『資本論』第3部第1稿について*

——オリジナルの調査にもとづいて——

大谷 禎之介

目 次

はじめに

1 第3部第1稿の外装について

2 第1束と第2束とについて

3 第3束について

4 第4束について

5 第5束について

6 草稿全体のページ数について

付論 第2部第4稿とその断稿とについて

はじめに

エンゲルス編の現行『資本論』第2部および第3部にはエンゲルスの手がかなり加えられていること、したがって、マルクスによる『資本論』執

* Teinosuke Otani: Über Manuskript I des 3. Buches des „Kapitals“ von Karl Marx.

Der Verfasser dankt dem Internationalen Institut für Sozialgeschichte in Amsterdam, das ihm die Gelegenheit gegeben hat, das Archiv des Instituts zu benutzen, und namentlich Herrn Dr. G. Langkau und Frau Dr. U. Balzer, die ihm beim Benutzen von Materialien Hilfe geleistet haben; dem Institut für Marxismus-Leninismus in Moskau, das freundlicherweise die von ihm gewünschten Materialien zugänglich gemacht hat, und namentlich Frau Dr. L. Miskewitsch, Herrn Dr. W. Wygodski und Frau I. Antonowa, die ihm bei seiner Arbeit im Institut Unterstützung erwiesen haben.

筆の過程、つまり彼の経済学研究とその叙述との過程を正確に知るためには両部の草稿そのものを調べる必要があること、——このことはすでに一般に認められていると言ってよいであろう。

両部の草稿のすべてがいずれは新 MEGA 第2部（『資本論』と準備労作）に取められるはずであり、これまでのところでも『資本論』第2部の「第1稿」がロシア語および日本語で¹⁾、「第2稿」全3章のうちの第1章および第3章がロシア語で²⁾、「第8稿」のうちの現行版第21章相当部分が原文および日本語で³⁾、それぞれ読むことができるようになっている。けれども、第2部のその他の草稿⁴⁾と第3部の諸草稿⁵⁾とは、その発表までにまだかなりの時間がかかるものと思われる。たしかに、草稿の調査にもとづいて草稿の状態や内容を紹介したり、かなり立ち入った考証を行ったりしている労作も次第に増えてきているので、それらにもとづいて未発表の草稿についてもいろいろなことを知るできるようになってきた。しかし、なかには、全体として、あるいはその一部に、信頼を置くことができないものもあって、そうしたものにもとづいて行なわれる考証には限界があるだけではなくて、それらが誤りを誘い出すことさえある。たとえば、リュベルの『資本論第2巻資料』⁶⁾——『資本論』第2部および第3部のリュベル版と言いうるもの——は、テキストの一部に未発表の草稿を利用しているほか、テキストへの編者注のなかで、草稿の状態や彼が編集したテキストと草稿との関係やエンゲルスの編集作業などについてかなり詳しく述べているので、草稿が発表されるまでは貴重な資料として利用されることであろうが、しかしその記述はしばしば正確さを欠き、また不十分、不完全であって、全面的に信頼してしまうのは危険だと言わざるをえない。したがって、まだしばらくのあいだは、未発表の草稿の場合その現物にあたって調べる必要が消えない。幸いなことに、第2部および第3部の未発表の草稿の大部分がアムステルダムの社会史国際研究所（以下、IISG と略す）にあって、その photocopy を見ることができる⁷⁾ので、これまでも多くの研究者がここでさまざまな草稿を調べており、これから

も大いに利用されることであろう。

わたくしも、1980年4月から1982年3月までの2年間、法政大学在外研究員として滞欧したさい、1980年11月—1981年3月のあいだに通算45日、1981年12月—1982年3月のあいだに通算60日、IISGで『資本論』第2部および第3部の草稿を調べることができた。前者の期間にはもっぱら第2部の草稿を調べた。そのうち、「第8稿」中の、現行版第2部第21章にあたる部分については、その調査結果を別稿で発表した⁸⁾。後者の期間には、第2部について補足的な作業もしたが、主として第3部の草稿を調べた。そのさい、1981年11月—12月、ソ連科学アカデミー東洋学研究所との交換協定にもとづく法政大学交換研究員としてモスクワに滞在中、マルクス＝レーニン主義研究所（以下、ML研と略す）で第3部の「主要原稿」の解説文⁹⁾に接しえたことが、仕事を大いに楽にしてくれた。

第3部の草稿のうち、エンゲルスが「主要原稿」Hauptmanuskriptと呼んだ最も大部な草稿については、すでに佐藤金三郎氏が、1970年の調査にもとづいて1971—72年に、紹介を含む詳細な考証を発表されており¹⁰⁾、その内容はそれから10年を経た現在の時点でも、その間にこの草稿について若干の新たな情報がつけ加えられた¹¹⁾にもかかわらず、それについての最も重要な情報源たることをやめていない。佐藤氏のこの論稿はわたくしの調査のさいにもしばしばガイドの役をしてくれたのであるが、今回のわたくしの調査は、結果的には、佐藤氏がそのなかで、時間切れで十分に調べることができなかつたとされているところに力点を置いたものとなったように思われる。

今回の調査では、第3部については、次の3つがまとまった結果として残った。

- (1) 現行版の「第1章 費用価格と利潤」に用いられた「第2稿」および「第3稿」、それに、エンゲルスが利用しなかったがこの両稿のあとに書かれたとみられる断稿、この3つの草稿を解説し、この3稿相互間の関係、それらの現行版第1章との関係を、ほぼ把握できた。

(2) 現行版「第5篇 利子と企業者利得とへの利潤の分裂。利子生み資本」のための草稿のほとんど全文を掌握することができた。また、これに関連して現行版「第19章 貨幣取扱資本」にあたる部分の全文も把握できた。

(3) 現行版「第7篇 収入とその源泉」のための草稿を、解読不能の箇所を若干残してはいるが、ほぼすべて掌握することができた。

以上の調査結果は、整理をすませたのち、折を見て順次発表していくつもりである。ただし、第2と第3のものについては、その全文を活字にすることができないので、発表のしかたを工夫したいと思っている。

ところで、IISGの所蔵する「マルクス＝エンゲルス遺稿」の諸資料は、原則として、それらの photocopy だけが一般に公開されているのであるが、わたくしは好運にも、第2部および第3部の草稿のうち IISG に所蔵されているものすべてについて、そのオリジナルをも調べることができた。といっても、もちろん IISG での仕事の全期間にわたってそれを利用できたわけではない。オリジナルでしか判断できない疑問点を溜めておいて、それを調べるといふかぎり、特定の日に数時間ずつ見せてもらったわけである。便宜をはかってくれたランカウ (Götz Langkau) 氏も、オリジナル閲覧時に世話をしてくれたバルツァー (Ursula Balzer) 女史も、繰り返して、「MEGA 編集に必要なかぎりで両 ML 研の関係者に見せているだけだから、あなたの場合は例外であることを忘れないでほしい」と言っていたが、じっさいオリジナルに接してみると、オリジナル保存の見地からすると、たった1回の通覧でも危険きわまりないものであることを痛感した。たとえば、photocopy には写っているのにオリジナルでは欠けているページ番号がある。これは明らかに、photocopy の作成後にくずれ落ちてしまったものである。また、2つ折り全紙の折り目が切れかかっていて、2枚になってしまう寸前のところがある。また、2時間ほどの調査のあとで草稿を片づけると、机の上に細かい紙の屑がかなり落ちている。人類のかけがえのない遺産を損うという思いは、その閲覧をた

びたび逡巡させた。しかしながら、フォトコピーの写りが悪くて見にくいというようなものは我慢するとしても、草稿の紙の状態や各ページのつながりかた、使用筆記具の色など、フォトコピーでは調べようもないことで、しかもどうしても知りたいことも多く、自ら閲覧の可能性を見逃すことがついにできなかった。結局、オリジナル調査は、通算7回に及んだ。

本稿では、第3部の「主要原稿」について、そのオリジナルの調査で知りえた草稿の外的状態を主とし、それに草稿の諸部分の内容や構成にかかわる若干の考証を加えて、概要をまとめておきたいと思う。その内容は、あるいはまことに末梢的、好事家的な穿鑿と見えるかもしれないが、実際には、このような外形的な手がかりが、草稿執筆の時期の考証や各草稿間、さらに各ページのあいだの執筆の順序の推定にとって、意外に重要な意味をもってくるのであり、またそのことを通じて、『資本論』の理論的内容や性格の理解にも一定の役割を果たしうるのである。オリジナルに接することは、通常容易にできる、という事柄ではないので、それによって得た知識はなるべく詳しく紹介するのがわたくしの義務であろう。

いうまでもないことであるが、本稿はわたくしのノートにもとづいて帰国後まとめたものであって、いま疑問の点（たとえば記載もれや誤記かとも思われるような箇所）が出てきても、もういちど原典にあたって確認することができない。そういうところも、ノートのままに記しておく。

本稿では、第3部の「主要原稿」を「第1稿」と呼ぶことにする。この第1稿はきわめて浩瀚なものであるばかりでなく、第3部の全篇の原稿を含んでいる点でも、まさに「主要原稿」と呼ばれるのにふさわしい。ごく簡単に「第3部草稿」とさえ呼ばれているほどである¹²⁾。実体がわかれば呼び名はどうでもよいことであるが、ここではさしあたり、あとの3草稿を「第2稿」、「第3稿」、「第4稿」と呼んで、この4つの草稿の全体が第3部の草稿を成している、という気持を込めて、それを「第1稿」と呼ぶことにした。たんなる便宜にかかわることであって、他意はない。

なお、この第1稿の「外観」と「構成」についてはすでに佐藤氏が前出

の論稿で紹介されている。現在のように MEGA その他の多くの材料が与えられていないときによくぞ調べられたものと感嘆するのであるが、残念ながら氏はオリジナルを見られなかったので、氏の記述にはそのことによる限界がある。その点、本稿は氏の記述を補うという性格をもつことになると思うので、多少わずらわしいかもしれないが、氏の論稿に——とくに注のなかで——関説することが多く、また氏の記述とわたくしの調査結果との相違を述べたりもしている。この点も他意はないので、ご了解を乞う次第である。

- 1) K. Маркс и Ф. Энгельс, *Сочинения*, т. 49, Москва, 1974, стр. 234-498.
マルクス『資本の流通過程——『資本論』第2部第1稿——』, 中峯照悦・大谷禎之介他訳, 大月書店, 1982年。
- 2) K. Маркс и Ф. Энгельс, *Сочинения*, т. 50, Москва, 1981, стр. 1-302.
- 3) 拙稿「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について——『資本論』第2部第8稿から——, 『経済志林』第49巻第1号および第2号, 1981年。
- 4) 現在残されている第2部の草稿は、マルクスが番号をつけた「第1稿」—「第4稿」とエンゲルスが番号をつけた「第5稿」—「第8稿」とそのほかいくつかがごく小さい断稿とである。このなかで第1稿と第6稿とのオリジナル, それにもしかするとごく小さい断稿の1つか2つがモスクワの ML 研にあるだけで、残りはすべてアムステルダムの IISG に保存されている。アムステルダムの現行の目録で「第6稿」とされている草稿 (A 67: Das Kapital, Bd. II, Manuskript VI: “Der Kreislaufsprozess des Kapitals”, ab 20. X. 1877, deutsch, 7 S.; Marx-Aufschrift: 20 Okt. 1877 begonnen) は、じつは「第6稿」ではなく、草稿番号のある8つの草稿以外のものである。このことをアムステルダムでのフォトコピー調査で確認していたので、モスクワの ML 研を訪れたさい、ヴィゴツキー氏に、第6稿はモスクワにあるのかとたずねたら、アムステルダムにある筈だという答えが返ってきた。そこで、アムステルダムの目録でのA67が別物であることを説明すると、それでは第6稿はなくなってしまったのだろうか、という話になり、わたくしは、「これで、どうしてももう一度アムステルダムで調べ直す用事ができたわけだ」と軽口をたたいて別れたのであるが、数時間してヴィゴツキー氏があたふたとやってきて、「第6稿はこのアルヒーフにあることがわかった」、と言うのであった。そのさい、手許で見ていた資料に気を奪わ

れて、第6稿のフォトコピーの閲覧を希望しなかったのは、かえすがえすも大失策であった。

なお、グリゴリヤーンの論文 (С. М. Григорьян, *К Вопросу о рукописях II Тома “Капитала” К. Маркса*, «Научно-информационный бюллетень сектора произведений К. Маркса и Ф. Энгельса», № 19, Институт Марксизма-Ленинизма при ЦК КПСС, 1970) のなかで、草稿番号のある8つの草稿のほかに5つの草稿の存在を記しているが、このうち3つはほとんど確実に、アムステルダムにあるものを指しており、残る2つのうちの1つも、アムステルダムにあるものである可能性がある。ちなみに、グリゴリヤーン論文には不十分な点が多く、ML研でもすでに過去のものとして扱われている様子が見えた。また、そのなかで各草稿の大きさを示すのに使われている л. (лист) という単位は、各草稿の解読文のページ数であって、草稿そのものの全紙の数ないしページ数とは別物である。

- 5) 現在残されている第3部の草稿は、まったくの準備稿を含めるとかなりの数 (IISG の目録で11項目12点) にのぼるが、そのうち、第3部のテキストとして書き始められたものは4つで、そのうちエンゲルスによって現行版の編集に使用された3つの草稿にはエンゲルスによって「第1稿」、「第2稿」、「第3稿」と書き込まれており、残りの1つには「不使用」 nicht benutzt と書かれている。この4つの草稿はすべて IISG に所蔵されている。
- 6) *Matériaux pour le deuxième volume du Capital. Oeuvres de Karl Marx, Économie II. Édition établie par Maximilien Rubel, Paris 1968, p. 499-1488.* 以下, Matériaux と略記する。
- 7) 前出, 注4)および5)を参照。
- 8) 前出拙稿「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について。
- 9) ЦПА ИМЛ, Ф. 1, оп. 1, ед. хр. 1848.
- 10) 佐藤金三郎「『資本論』第3部原稿について」(1), 『思想』561号(1971年4月); (2), 同564号(同年6月); (3), 同580号(1972年10月)。
- 11) わたくしの知るかぎりでは、第3部第1稿(「主要原稿」)の草稿そのものについて新たな情報をもたらしたものはごくわずかである。——В. Выгодский, Л. Миськевич, М. Терновский, А. Чепуренко, *О перибизации работы К. Маркса над «Капиталом» в 1863—1867 гг.*, «Вопросы экономики», № 8, 1981. (邦訳: ヴェ・ヴィゴツキー, エリ・ミンケヴィチ, エム・チェルノフスキー, ア・チェブレンコ「1863—1867年におけるマルクスの『資本論』執筆の時期区分について」, 中野雄策訳, 『世界経済と国

際関係』第56号、1982年。) 田中菊次編著『経済原論』、青木書店、1980年、299—307ページ。谷川宗隆「『資本論』第三巻・第四篇・第十七章「商業利潤」の「原稿」についての調査ノート」、『愛媛法学会雑誌』、第7巻第1号、1980年；同巻第2号、1981年。大村泉・黒滝正昭「「剰余価値の利潤への転化」をめぐって——現行版第二章「利潤率」と原草稿との関連を中心に——」、北海学園大学『開発論集』第30号、1981年。以上のうち、谷川氏のは在欧中に入手し、草稿と対照してみたところ、残念ながらわたたくしの作業の手間を省いてくれるものではまっただくなかった。なお、上記、大村・黒滝両氏による論稿のなかで、第3部第1稿のフォトコピーを見てその状態について書かれているのは黒滝氏であり、その執筆分担も明記されている。本稿では、以下で、黒滝氏の執筆部分についてのみ言及する。

- 12) たとえば、前注に挙げた4筆者による共同稿では、とくに断り書きをすることもなく、「『資本論』第3部の草稿」という言葉で第1稿をさしている。

1 第3部第1稿の外装について

第3部第1稿¹⁾は、ほぼ40×30cmのサイズの紙(全紙^{ゴーズン})を2つ折りにしてつくられた4ページ(2紙葉)の用紙(つまりフォルリオ)を、綴じることなく1枚ずつ使い、それらに表紙および中表紙をのせた(あるいは挿入した)だけのものである。全紙を2つ折りにしたものが基本であるが、すぐ見るように、ほぼ同じ大きさの全紙を2つに切って、これを2ページとして使っている部分もある。これが全部で5つの束(Konvolut)にわけられているが、このうち第2の束と第3の束は1つのファイルに入れられており、IISGでは全部で4つのファイルに分けて保存されている。5つの束のうち第1束は第1章の途中、116ページまで、第2束は第1章の終わりまで、第3束は第2章と第3章、第4束は第4章、第5章、第6章の3つの章、第5束は第7章、を含んでいる。このように5つの束にたばねたのが誰か、またいつか、ということは不明である。

現在残っている表紙は7枚ある。

- (1) 草稿全体の一番上に2ページの1紙葉がある。これがかつて、後述の表紙(3)の紙葉とつながっていて、1全紙をなしていたことは、紙質、

サイズ、左端の切れ口からみて明らかである。

サイズ 325×198 mm で、無野、やや黄色でふちはひどく褪色している。透かしは、図柄のほか、E. TOWGOOD FINE、それに 26.5 mm 間隔の平行線である。(なお、以下、透かしについて「平行線」と言う場合には、例外なくつねに、全紙の短辺、つまり各ページの長辺に平行なものである。)

表側の上方に、「第3部」 *Drittes Buch.*²⁾ と書かれている。この書体は、第1稿執筆時の書体とは異なっている。それは、1970年代の後半の諸草稿にみられる、ラテン書体がいっただけのものである。この表紙そのものが後につけられたのか、あるいはこの「第3部」だけがあとから書かれたのかはわからないが、いずれにしても、第1稿執筆時に書かれたものではない。

このページにはそのほかに、さまざまな時期にさまざまな人によって書かれたものと思われるさまざまな記載がある。上の *Drittes Buch.* のすこし下に、赤鉛筆で大きく I と書いてある。これはマルクスによるものかエンゲルスによるものか不明であるが、「第2稿」、「第3稿」にマルクス自身はノート番号をつけていないところからみて、エンゲルスのものではないかと思われる。

その下方に鉛筆で NL 18 (囲みがつけてある) とあるが、これは、かつてモスクワ ML 研のためのフォトコピーをつくるさいにつけられた整理番号であろう。この番号は、ときとして、資料相互間の関係をつきとめるのに役立つことがある。というのは、この番号が現在の保存状態ないし現在の分類と一致していない場合には、かつて草稿の状態が現在とはちがうものであった時期があることを示唆しているからである。この NL 18 の場合もその1例であって、次の表紙(2)が NO, 第1稿の本文が NM であることを考えると、上のフォトコピー(これは現在 IISG で使われているフォトコピーとは別物である)をとるときには、この三者がみな別のところにあったこと、したがって

そのあとでこれらが現在のように合体されたことを示唆しているのである。

さらに下方には、鉛筆で *ausgelassen* 64/65, 87/88 (64/65, 87/88 ページは飛ばされている), さらに同じく S. 1-116+Titelbl. (2. S.) とある。これは第1束についてのものであって、じっさい第1束では、64および65ページ, 87および88ページが、誤って飛ばされてしまって、存在しない。116ページは第1束の最後のページである。Titelbl[att] (表題とびら) として「2ページ」を数えているのは、おそらく Blatt (紙葉) が2枚ある、という意味であろうと思われる。というのは、以上の鉛筆書きは IISG の旧目録の記載⁹⁾と照応しているのであって、おそらくは旧目録作成時に書かれたものと思われるのであるが、旧目録ではこの部分は „Titelblatt 2“ となっており、これが正しいものと考えられるからである。

このほか、青鉛筆で A54 とあるが、これは IISG での旧目録での第1稿の整理番号であり、右肩には鉛筆で i と書かれているが、これは次葉の(2)の ii および iii に対応するもので、表題が書かれている表紙を i, ii, iii と数えたものであろう。この表紙の裏側(白)にはこれに続く数字は書かれていない。これもマルクスおよびエンゲルス以外の手によるものであろう。ほかに左肩近くにインクで T 19 A 1 とあるが、これはどういう種類の整理番号なのかわからない。マルクスの Drittes Buch. のインクとは明らかに違うインクである。裏面はまったくのブランクである。右側(小口側)の縁はところどころ欠け落ちているが、しかしまだ直線の切り口がはっきりと残っている。これにたいして左側(のど側)の縁は完全にぼろぼろになっており、もとの縁(つまりもとの折り目)はほとんどわからなくなっている。

- (2) 2枚目の表紙(中表紙)も、2ページの全紙半切りである。これもかつては対応する2ページの1紙葉とつながっていたのではないかと思われるが、それにあたる紙葉はみあたらない。

サイズ 336×198 mm で、無野、紫色で周囲は変色している。透かしは、26.5mm 間隔の平行線である。つまり、(1)とはちがう紙である。

2 ページの 1 紙葉ではあるが、どちらが表であるかは、いくつかの点からみて明らかである。第 1 に、まえの(1)と同様に、しっかりしている（ほとんどいたんでいない）縁を小口（表では右、裏では左）側、いたんでいる（完全にぼろぼろになっている）縁をのど（表では左、裏では右）側、とみることができる。第 2 に、片側には、マルクスの手によって、インクで *Drittes Buch*. その下に *Die Gestaltungen des Gesamtprocesses*. とあり、その反対側には、マルクスの手によって同じものと思われるインクで、*Drittes Buch*. その下に *Erstes Capitel. Verwandlung v. Mehrwerth in Profit*. さらにその下に *Mehrerth u. Profit*. とある⁴⁾。前者が第 3 部全体の表題、後者がそのうちの第 1 章およびさらにそれより下位の表題であることは明らかである。とすれば、前者が表、後者が裏に位置するのが自然であり、その逆は考えられない。第 3 に、ソ連 ML 研のためのフォトコピーをとるときにそのような順序になっていたであろうことは、いま述べた表側に NO 28、裏側に NO 29 と書いてあることから確かであると思われる。第 4 に、だれの手によるものかわからないが、まえの(1)の表の右肩につけられた i に続く ii が表の右肩に iii が裏の左肩につけられている。番号の順序も、その左右の位置も、ii が表、iii が裏とみるべきことを示している。以上の 4 つの理由から、表裏がいずれかは明白である。わたくしがオリジナルをみたさいには、表裏は正しく置かれていた。ただ、閲覧者に公開されているフォトコピーでは、この表裏が逆の順序に置かれており、しかも、A 54/2 という記号が裏に、A 54/3 という記号が表に、それぞれ鉛筆で——ただしフォトコピーにのみ——記入されている。さきの(1)には——これもフォトコピーにのみ——A 54/1 と記されており、これは旧目録による整

理のさいにフ・ォ・ト・コ・ピ・ーがこの順序になっていたことを示している。しかしこの順序は、明らかにフォトコピーの整理のさいに生じた誤りである⁵⁾。この種のフォトコピー番号は、第1稿のフォトコピーのその他の箇所でも、いくつも単純な誤ちを犯している⁶⁾。

以上に記したもののほか、表側に旧目録番号の A 54 がインクで書かれている。

なお、この紙葉表裏でマルクスが書いているインクの字の太さは、まえの(1)での太さとは明らかに異なっている。この点からみても、(1)と(2)とは違う時点で作られたものだと推定できる。

- (3) 第1束のおわりに、つまり草稿116ページのあとに、2ページの1紙葉がはいっている。これはその紙質とサイズとからみて明らかに、前記の(1)とともに1全紙をなしていたものである。ただし、マルクスがこの全紙を表紙としてつけたときに、裏表紙にあたるこの(3)がいまの場所、つまり第1束の最後にあったのかどうかは不明である。
- (4) 第4束のまえ(243ページのまえ)に、2ページの全紙半切りが2枚はいっているが、この両者はまったく別の紙であって、つながっていた可能性はない。まず第1のものは、表にはなんの書き込みもない白で、裏には、ひげ文字で an……という記入欄と in……という記入欄と、さらに右上方には切手を貼る箇所のしるしかと思われるような点線での枠が作ってある。かなり厚い紙であるが、これは第1稿がSPDのアルヒーフにあったときに、なにかの用紙をここに流用したものではないかと思われる。いずれにせよ、マルクス、エンゲルスのものでないことは確かであろう。
- (5) 第2のものは、黄色っぽく変色した1紙葉である。これは、上述の(2)に対応するものでないことが、その紙質から明らかである。だれが挿入したものか、まったく不明である。透かしははいっていない。
- (6) 第5束のまえに、2枚の表紙がはいっている。どちらも2紙葉4ページのもので、裏表紙となる側は、どちらも第5束の末尾のところに

挿入されている。言いかえれば第5束はこの2枚の表紙のなかにはさみこまれているわけである。そのうちの1枚目は、きわめて新しい紙で、29 mm 間隔の平行線の透かしがはいっている。その表には、Marx blz. 528-575 + pp. 531 a+b と書かれている。エンゲルスのものでないことは明らかである。この第5束には第7章が含まれているのであるが、マルクスによるページづけがなく、エンゲルスがほぼ1ページおきにページづけをしている。その1ページ目には、エンゲルスによって、528 というページ番号が打たれている。そしてこの章の末尾（したがってまた第1稿の末尾）は575ページである。上の Bl [att] z[ahl] 528-575 はそのことを表わしている。また531ページと532ページとのあいだに——後述するように——2ページの1紙葉が挿入されており、これには、マルクス、エンゲルス以外の者の手で531 a, 531 b というページづけがなされているが、上の pp. 531 a+b はそれをさしている。なお、第4束は、528ページとその次の白紙のページとで終わっているので、じつは、第5束冒頭の528, 529ページは重複ページとなっているものである。

- (7) 2枚目は、裏側にひげ文字での印刷がある比較的新しい紙である。表には、Kapital Buch III Revenue u. ihre Quellen VII. Kapitel S. 528-575 と書かれている。これも SPD のアルヒーフにあったときのものなのであろう。

表紙と見なしうるものは以上の7枚である。そこで次に、各束の状態を、外形的なことを主にしながら、しかし同時に、内容にわたることもいくらかつけ加えて、見ていくことにするが、そのまえになおいくつかのことを。

本文に用いられている2つ折りにした全紙は、すべてもう一度折って紙の中央に折り目をつけてある。これは明らかに、上半部を本文に用い、下半部を注のために空けておく、という、マルクスの多くの草稿でのやり方をこの第1稿でもとろうとしているからである。このようなページの使い

方が多いのであるが、しかし、本文が下半部まで続けて書かれている場合も多いし、また、上半部は空けたままにして、下半部に延々と続く長い注を書き続けたりもしている。

使われている紙はどれもかなり変色し、縁はくずれかかっている、おそらく折れ目がついていたところから取れたのだらうと思われるような角の欠落が生じ、ページ番号がなくなっているページもある。しみも、執筆時のインクのしみと見られるもの以外にもかなり生じている。

使用筆記具は、黒インクで書いて行き、いったん書いてしまったものにのちに手を加えたり、線を引いたりするとき、鉛筆や赤鉛筆を使う、というのが原則となっている。おそらくエンゲルスのもと思われる筆跡で局部的な訂正や、ごくわずかであるが欄外書き込みがなされている。赤鉛筆による記入は、多くエンゲルスのもと思われる。本文中の注番号と注との対応を点検した赤鉛筆によるマークがほとんどの注につけられているが、これはエンゲルスによるものであろうか。フォトコピーで太く写っている線はまず赤鉛筆とみてまちがいないようであり、フォトコピーでもかなりの程度まで使用筆記具をみわけることができるわけである。

なお、第1稿本文に使われている全紙を、以下では通して第1全紙、第2全紙のように呼ぶことにする。現在2つに切れていても当初つながって1枚の全紙をなしていたことが明らかな場合には、当初のものを1全紙と数え、前後から完全に独立した半切れ（2ページ）の全紙も1全紙と数える。もちろんこれは草稿の状態把握の便宜のためのものであって、オリジナルでもフォトコピーでも、この種の番号づけは——後述のように第2章でやや似たものがみられるほかは——行なわれていない。

- 1) 念のため、IISG の新目録でのこの第1稿についての記載を掲げておこう。

A 80 Das Kapital, Bd. III,

1864/1866, deutsch, englisch, französisch, 373 $\frac{1}{4}$ S.

S. 47, 61/73, 75, 77, 79, 88, 96/942 (Edition Dietz 1956)

Ökonomische Manuskripte 1863/1865; Kapital III, Manu-

skript I, S. i/iii; 1/575.

- 2) マルクスは、区分番号と表題ないし見出しとはほとんど例外なく——ごくまれに引き忘れの部分があったりするが——下線を引いている。以下、わずらわしいので、この種の下線はいっさい省くことにする。
- 3) 旧目録での記載は次のとおりである。(川鍋正敏「国際社会史研究所所蔵マルクス・エンゲルスの草稿および読書ノート目録」、『立教経済学研究』第20巻第3号、1966年、9—10ページ、参照。)

A 54 Drittes Buch. Die Gestaltungen des Gesamtprocesses.

von Engels bezeichnet als: Ms. I.

571 S. fol. Titelblatt 2 und S. 1-575. Paginierung von Marx.

5 Konvolute: 1) 1-116, 2) 117-154, 3) 155-242, 4) 243-527,
5) 528-575.

Ausgelassen: S. 64, 65, 87, 88, 138, 141-149, 386, 389, 399,
479.

Nicht beschrieben: S. 118, 139, 140, 150, 265, 266, 405.

Ausserdem vorhanden: S. 202 a, 202 b, 283 a, 325 a, 325 b,
340 a, 352 a, b, c, d, e, f, g, h, i, j, 417 a,
417 b, 513 a, 531 a, b.

この記載の不十分な点は、行論のなかで明らかになるのであるが、あらかじめここにまとめておこう。(1) „Ausgelassen“ (飛ばされている) ページは、上記のほか387, 388ページがある。(2) „Nicht beschrieben“ (書かれていない) ページは、上記のほか528ページがある。(3) „Ausserdem vorhanden“ (そのほかにある) ページは、上記のほか528ページ (これは(2)での528ページとは別で、書かれている) がある。(4) したがって、ページ番号以外に何か書かれているページは569ページ (575+22-20-8) であって、上記の571ページ (575+21-18-7) は誤りである。なお、後述するが、上に記載されているほかページ番号がない空白ページが3ページあり、草稿本文の物理的総ページは580ページ (575-20+22+3) である。なお、本文で述べたように、„Titelblatt 2“ というのは、とびらが2枚あるということであって、表紙での記載 „Titelbl. (2 S.)“ のほうが、誤解を生むものとなっているわけである。したがって、佐藤氏が上の目録中の „Titelblatt 2“ の記載について、「タイトル・ページが2ページというのはあきらかに間違い」と書かれている (前出論稿, (1), 121-122 ページ) のは、誤解にもとづくものと思われる (この点については、黒滝氏の前出論稿, 155 ページでの指摘が正しい)。

- 4) これらの記載の書体は、前の表紙(1)とは異なり、本文の書体と同じものである。ただし、このことがただちに、この表紙と本文とが同時に書かれたことを意味するものでないことはもちろんである。
- 5) 以上のところから、黒滝氏の前出の論稿での次のような推論が誤りであることは明らかであろう。氏は、まず次のように書かれている。

「Ms. I. はマルクスによる1) ページ以前に、マルクスによるページづけのない Titelblatt が2枚(計4ページ)あり、草稿の整理者によってフォトコピーを撮る以前に、第1 Blatt 第1ページには „i“, ……第2 Blatt 第1ページには „iii“, 同 Blatt 第2ページには „ii“ と記入されている。これにたいしてフォトコピー撮影後、鉛筆で書き込まれた旧目録の番号づけでは、上記 „i“ ページは „A 54/1“, 上記 „iii“ ページには „A 54/2“, 上記 „ii“ ページは „A 54/3“ とされて、ページの順序がオリジナル・ノートの物理的ページに即して、事実上訂正されている。」(大村・黒滝、前出論稿、152ページ)

氏は「第2 Blatt」の表裏をフォトコピーの状態と „54/2“ および „A54/3“ というフォトコピーのみに与えられた誤った番号とによって、これが「オリジナル・ノート」の「物理的ページ」の状態だと決められ、これにもとづいて „ii“ および „iii“ の番号づけが逆になっている、と判断されているのであるが、これはいささか軽率な判断だったと言わねばならない。したがって、上の引用中の「旧目録」という語につけられた注のなかでの次の記述は不適切と言わざるをえない。

「筆者がフォトコピーに写っている各 Blatt の重なり具合から判断しえた限りでは、マルクスのノートの物理的なページの順序は第1 Blatt 第2ページの白紙を度外視すれば旧目録のページづけのとおりである。佐藤金三郎氏が…… „i“, „ii“, „iii“ の順序を機械的に踏襲しているのは、新目録と共通した問題点を含む把握のように思われる。」(同上、155ページ)

フォトコピーは、撮影するとき必ずしも草稿の位置のままにおかれるとはかぎらないので、「フォトコピーに写っている……重なり具合から判断」するのは危険である。上に佐藤氏について「機械的に踏襲」と書かれているのは、佐藤氏が前出論稿(1)の122-123ページで、 „i“, „ii“, „iii“ のページづけのとおり、表題の順序を紹介されていることを指しているのであるが、この批判が当たらないことは明らかであろう。

- 6) たとえば、草稿 297, 298, 423 の各ページのフォトコピーがそれぞれ2枚ずつあり、それに誤って別々の整理番号をつけている。その結果、この整理番号はあるべきものよりも3ページ多くなってしまっている。

2 第1束と第2束とについて

第1束は、すでにふれたように、第1章の中途116ページまでを含み、第2束は、第1章の残り、117—154ページを含んでいる。まず、第1章の草稿を成すこの2つの束をみることにしよう。

第1束は、全部で28枚の全紙から成っていて、つねに各ページの小口側の肩にページ番号がつけられている。この番号は、1全紙について4ページで進んでいくことになるが、第16全紙の途中で、64、65ページを誤って飛ばしたために、この全紙は61、62、63、66ページとなっており、また、第22全紙は87ページから始まるべきところを、87、88ページを誤って飛ばしたために、89ページから始まっている。そのため4ページのずれが生じ、第28全紙の最後のページが、112ページではなくて116ページとなっている。

この束の紙は全部同じものである。サイズ 400×316 mm の2つ折り、無野、やや薄い青色で褪色している。透かしはなく、紙質は中質とでも表現すべきものである。

1ページは、MEW版第3部の35ページにその複写があるので、その様子がわかる。この複写には写っていないが、右肩に1)というページ番号がつけられている。右上方には、エンゲルスによる——筆跡から彼のものであることがわかる——「第1稿」Ms. I というインクでの書き入れがあるが、これにはその上下に赤鉛筆で線が引かれている。

この1ページの表題と本文とはすでにしばしば取り上げられてきており、とくに佐藤氏の前掲論稿ではその全文が示されている¹⁾が、そのなかのいくつかの部分について述べておきたいことがあるので、煩を厭わず、ここでも見ておくことにしよう。

まず、左右の中央に第3部の表題、次行に第1章の表題、続いて左端から第1節の表題が書かれている。

第3部。総過程の諸形象化。

第1章。剰余価値の利潤への転化。

1) 剰余価値と利潤。

Drittes Buch. Die Gestaltungen des Gesamtprozesses.

Erstes Kapitel. Verwandlung v. Mehrwerth in Profit.

1) Mehrwerth u. Profit.

第1パラグラフは次のようである。

「すでにみたように、全体として考察された生産過程は、生産過程と流通過程との統一である。このことは、流通過程を再生産過程として考察したさいに（第2部第4章）詳しく論じた。この部で問題になるのは、この「統一」について一般的反省を行なうことではありえない。問題はむしろ、資本の過程——全体として考察されたそれ——から生じてくる具体的諸形態を見つけだして叙述することである。〔諸資本の現実的運動においては、諸資本は次のような具体的諸形態で、すなわち、それらにとっては直接的生産過程における資本の姿態も流通過程における資本の姿態もただ特殊的諸契機として現われるにすぎない、そのような具体的諸形態で対し合う。だから、われわれがこの部で展開する資本のもろもろの形象化は、それらが社会の表面で、生産当事者たち自身の日常の意識のなかで、そして最後にさまざまな資本の相互の行動である競争のなかで生じるときの形態に、一步一步近づいていくのである。〕」

Wir haben gesehen, daß d. Productionsprozess im Ganzen betrachtet Einheit v. Productions- u. Circulationsprozess ist. Bei d. Betrachtung d. Circulationsprozesses als Reproductionsprozess (ch. IV Buch II) wurde dieß näher erörtert. Worum es sich in diesem Buch handelt, kann nicht sein allgemeine Reflexionen über diese „Einheit“ anzustellen. Es gilt vielmehr d. konkreten Formen aufzufinden u. darzustellen, welche aus d. Process d. Capitals—als Ganzes betrachtet—hervorwachsen. [In d. wirklichen Bewegung d. Capitalien treten sie sich in solchen konkreten Formen gegenüber,

für die die Gestalt d. Capitals im unmittelbaren Productionsprozess, wie s. Gestalt im Circulationsprozess nur als besondere Momente erscheinen. D. Gestaltungen d. Capitals, wie wir sie in diesem Buch entwickeln, nähern sich also schrittweis d. Form, worin sie auf d. Oberfläche d. Gesellschaft, im gewöhnlichen Bewußtsein d. Productionsagenten selbst, u. endlich in d. Action d. verschiedenen Capitalien auf einander, der Concurrenz auftreten.]

MEW版にある複写でもわかるように、このパラグラフの全体が角括弧に入れられており、またこのパラグラフの左側には、縦線が引かれている。フォトコピーではこの角括弧と縦線のどちらも、ほかの部分よりやや太いことがはっきりわかるが、じつはこの両者は赤鉛筆で書かれているのである。これは、第3部編集のためにエンゲルスが書いたものであろう。したがって、このパラグラフのなかでマルクス自身が書いた角括弧は、第5番目の文章からこのパラグラフの末尾までを囲む角括弧だけということになる。この後の方の括弧がマルクスによって、しかもはじめから書かれたことは、ほとんどまちがいないと思われる。この括弧の存在は、すでに佐藤氏が指摘されているように²⁾、このパラグラフの内容の理解にとってきわめて重要な意味をもっている。エンゲルスの手がはいった現行版冒頭のパラグラフとの微妙な違いも、この括弧の処理——エンゲルスはこれを省いた——と深くかかわっている³⁾。

上のパラグラフのなかで、やはりひとことふれておく必要があるのは、「流通過程を再生産過程として考察したさいに（第2部第4章）」と書かれている点である。原文中の（ch. IV Buch II）のなかの「IV」は、どうみてもIVであって、IIIとはみえない。なんと書いてあるか、と聞かれたならば、IVと書いてある、と答えるほかはないであろう。そこから、マルクス自身が第3章に続く第4章なるものを構想していた可能性を考えられるむきもあるようであるが、わたくしは、これまで与えられているものもろもろの手がかりからして、「IV」は「III」の誤記、つまり「第3章」である

とみるほかはないと考える。佐藤氏はあっさりと「第3章 [ch. III]」と読まれているが、それも「IV」とは考えられないということにもとづいてのことだったのであろう。このことは、ひとこと注記をしておかれるべきであったろう⁴⁾。

なお、上で Gestalt をふつう訳されているように「姿態」(大月訳ではしばしば「姿」としたが、Gestaltungen の方は「諸形象化」と訳した。ここでは、内容的には「人々の眼にうつるヨリ具体的な姿態をとっていくこと」といった意味で使われており、Gestalt および Form とははっきりと区別されるべきだと考えられたからである。しかも、そのような「形象化」が幾重にもつきかさなり、進行していくという意味で、「諸形象化」としたのであるが、熟さない言葉であることはたしかなので、もっといい訳語を見つけないかと思っている。

以上の第1パラグラフは、明らかに第3部の全体にかかわるものであって、次の第2パラグラフから、第1章第1節「剰余価値と利潤」の本来の叙述が始まることになる。しかしそれについては、現行第1章「費用価格と利潤」の草稿の分析を試みる別稿で触れることにしたい。

さて、「1) 剰余価値と利潤」の次にでてくる表題は、「3) 不変資本充用上の節約」3) Oekonomie in Anwendung d. constanten Capitals. である。つまり、佐藤氏と同様にわたくしも第2節、つまり2)の番号と表題とをみつげることができなかった。おそらく、注を含む第1節の全体を、のちに第1節「剰余価値と利潤」と第2節「利潤率」に再編成するつもりだったのであろう。

この部分は、ノートの使いかたがやや異例なものとなっている。1ページの第2パラグラフで始まった本文は、2ページの上半部、3ページの上半部、4ページと続き、4ページの上方9行目でひとくぎりとなる。これに続いて、このページの3行目にある××の注記号につく注が始まり、このページの上半が終わったところで、次の5ページに続き、5ページの上半、下半両方を埋めたあと、6ページの下半部につながり、以下、7—30

ページの下半部を埋め、31ページの下半部の6行目で終わる⁵⁾。4ページの下半部には、3行目の××の直前にある注記号c)につく注と、注××の5行目にある注記号d)につく注とが書かれている。6ページの上半部は、4ページ9行目までの本文に続く本文が書かれ、これは8ページの上半部まで続き、このページ20行ほどで終わる。以下、9ページから30ページまでは、上半部は空白であり、31ページからふたたび上半部に本文が書き始められている。

71ページから上述の「3) 不変資本充用上の節約」が始まり、109ページから「4) 原料の価格変動」4) *Preißschwankungen d. Rohmaterials.* にはいる。第1束はその途中、116ページで終わっている。

このうち、第27全紙の1ページ目にあたる109ページの左肩(つまりのど側)には91というページ番号があり、また第28全紙の1ページ目にあたる113ページの左肩にも96というページ番号がある。さらに後者のページの下半部の左肩にも同じく96という番号がある。

次に、第2束について見よう。

「4) 原料の価格変動」の途中からその終わりまでを含んでいる第2束は、7枚の全紙から成っている。第34全紙では、正しくは137—140の4ページがくるところを、137, 139, 140, 150と誤ったページ番号が与えられている。つまり、138, 141—149のページ番号が飛ばされてしまっている。このため、この束だけで実際より10ページ分のページ番号がふえてしまっている。

他方、118ページと、上の第34全紙のなかの139, 140, 150の各ページとは、ページ番号があるだけで、あとはなにも書かれていない。フォトコピーにはとられていないので、フォトコピーの枚数はそれだけオリジナルのページ数より少なくなっている。

紙は、はじめの6枚の全紙が同じもの、最後の1枚は、次の束のはじめの部分と共通のものである。

はじめの6枚は、サイズは408×325 mmの2つ折り、8.5 mm 間隔の

罫が35本引かれていて、紫色の厚い上質紙である。透かしは E. Towgood 1863 のほか、草稿全体の一番上につけられた表紙——既述の表紙(1)——の透かしの図柄と同じ図柄がはいっている。

第35全紙は、サイズと紙質は上と同じ、ただ無罫で、透かしは E. Towgood 1864 である。

なお、この束の最初のページにあたる 117 ページの左肩には 104 というページ番号がつけられている。

- 1) 佐藤，前掲論稿(3)，112ページ。
- 2) 同前，114-115ページ。
- 3) 佐藤氏は、このパラグラフにつけられた二重の角括弧を、どちらもマルクスによるものと考えられている。パラグラフ全体を囲む角括弧がエンゲルスのものである点では、氏の叙述は訂正されるべきであろう。しかしながら、これによってこのパラグラフについての氏の解釈が成立しなくなるわけではまったくない。なぜなら、このパラグラフが第3部全体にかかわるものであって、次のパラグラフ以下から区切られるべきものであることは明らかであって、マルクス自身がこのパラグラフ全体を角括弧で括っていたとしても、事柄に決定的な変化が生じるわけではない。(もちろん、マルクスがそれを書かなかったことは、第4番目までの文章が文字どおり第3部冒頭の書き出しとなっていることを示しているのであって、どうでもよいことであるわけではない。)佐藤氏が問題とされたのは、マルクスが書いた、パラグラフ内部の角括弧だったのであって、その点についての氏の考察は傾聴に値するものであった。
- 4) この点について、黒滝氏は次のように書かれている。

「……, (ch. III Buch II)“ の部分に関しては、既にその後田中菊次氏によって、調査されており、服部文男氏によれば、田中氏は、誤記乃至は書き癖可能性もあるが、筆勢からみて „(ch. IV…)“ としか読めなかった、と語られていたとのことである。そして、この点を追試された服部氏も、MEWの写真版では少し歪んでいるが、IISG のフォトコピーでは、やはり „(ch. IV…)“ としか見えなかったということである。そして筆者自身も、同フォトコピーを見て „(ch. IV…)“ としか読めなかった。それにもかかわらず、佐藤氏が、すでに何の注記もなしに „(ch. III)“ と判読されているのは、おそらく「流通過程を再生産過程として考察した」のは、現在知られている限り「(第二部第三章)」しかないからだと思われる。」(前掲論稿，155ページ)

なお、わたくしはオリジナルについても、この箇所をよくみたのであるが、やはり、まずIを書き、次にその右にVを書いた、としか見えなかった。

- 5) 黒滝氏は、「佐藤金三郎氏が、マルクスは概して用紙の「下半分」に「本文」を書いていると述べている（同氏、『思想』第562号所収稿、120ページ参照）のは誤解のように思われる。氏の指摘される第一章のはじめの部分というのは、おそらく Ms. I. のマルクスによる9)/30)ページまでを指すと思われるが、これは8)ページの下半分から31)ページまで延々と続く長い注（Note）であり、従ってマルクスは下半分に書いているのである」（大村・黒滝、前掲論稿、157ページ、傍点一引用者）、と書かれているが、「8)ページの下半分から」というのは、正確ではないように思われる。

3 第3束について

この束には、「第2章。利潤の平均利潤への転化」Zweites Kapitel. Die Verwandlung des Profits in Durchschnittsprofit. と「第3章。資本主義的生産の進展のうちに生じる一般的利潤率の傾向的低下の法則」Drittes Kapitel. Gesetz des tendentiellen Falls der Allgemeinen Profitrate im Fortschritt d. capitalistischen Production. との2つの章が含まれている。23枚の全紙から成っている。最初の全紙である第36全紙から第47全紙までは、155ページから202ページまできちんとページづけがなされているが、これらの全紙はいずれもその1ページ目の左肩に、鉛筆でアルファベットによるページ番号が記されている。a) から始まって l) までであるが、このうち h) が2ページある一方、j) がない。したがって、155ページ—a, 159—b, 163—c, 167—d, 171—e, 175—f, 179—g, 183—h, 187—h, 191—i, 195—k, 199—l, となっているわけである。この番号についてはまたすぐにふれる。これらに続く第48全紙は、1ページ目が202 a とマルクスによって書かれており、次のページには、マルクスおよびエンゲルス以外の手で 202 b と書かれている。これに続く2ページは、ページ番号もない白紙となっている。この全紙が、次の第49全紙がすでに書き始められたのちに挿入されたものであることは、確かである。その第49全紙

から第58全紙までは、203ページから242ページまできちんとページづけがなされている。なお、上記の白紙の2ページは、もちろんフォトコピーには存在しない。こうしてこの束では、実際に残っているページ数によった数よりも4ページ少ないページ番号が最後のページにつくことになっている。しかし他方で、202 a, 202 b という追加のページがあるわけである。

さて、この束で用いられている紙は2種類である。第1は、さきに述べた a-1 の番号がつけられた12枚の全紙であって、これは、前の束の最後の全紙（第35全紙）と同じものである。この紙については前の束のところですで見えた。第2は、それに続く、第48全紙（あとから挿入されたもの）から最後の第58全紙までの11枚である。サイズは第1のものと同じ408×325 mm の2つ折り、無野、濃い目の紫色で厚みはすこし薄目の感じである。透かしは S. THOMAS 1864 である。

この束は、「第2章。利潤の平均利潤への転化」から始まっている。まず、1ページ目の155ページから「1）生産部門の相違による資本構成の相違とその結果である利潤率の相違」1) *Verschiedne Zusammensetzung d. Capitalien in verschiedenen Productionszweigen u. daher folgende Verschiedenheit der Profitraten.*, 167ページから「2）一般的利潤率の形成（平均利潤）と商品価値の生産価格への転化」2) *Bildung einer allgemeinen Profitrate (Durchschnittsprofit) u. Verwandlung d. Waarenwerthe in Productionspreise.*, 178ページから、「3）一般的利潤率の均等化のための競争。市場価格と市場価値。超過利潤」3) *Concurrenz zur Ausgleichung d. allgemeinen Profitrate. Marktpreise u. Marktwert. Surplusprofit.*, 196ページから「5）賃銀の一般的騰貴または低下（下落）が商品価格に及ぼす影響」5) *Wirkung einer allgemeinen Erhöhung od. Erniedrigung (Falls) d. Salaire auf d. Productionspreise der Waaren.*, 201ページから「4）資本家の補償理由」4) *Compensationsgründe d. Capitalisten.* が、それぞれ始まり、4)は202 b ページで終わっている。

第3章は203ページから242ページまでを占めており、佐藤氏が書かれているように¹⁾、節への区分けも、したがってまた下位の表題も存在しない。

上に述べたところから知られるように、第3章は全ページが同じ紙質の紙に書かれているが、第2章は、左肩に a-1 のページづけがなされた12枚の同質の全紙に、第3章で使われているのと同じ全紙1枚（202a および 202b ページを含む）を加えたものとなっている。マルクスは、左肩に l) と書いた全紙の途中または末行——といっても内容からみて末行であることは明らか——で第2章をいったん書き終えて第3章にはいり、第3章の途中またはその直後に、2 ページを書いて第2章につけ加えた（後半2 ページがブランクの1全紙をつけ加えた）のである。

この事実は、1981年に発表された、モスクワの ML 研マルクス＝エンゲルス著作部の4人の共同執筆になる論文、「1863—1867年におけるマルクスの『資本論』執筆の時期区分について」のなかで、第3部第1稿がまず第2章から書かれたという推定の1つの証拠としてあげられている。同論文は次のように書いている。

「マルクスは第3部草稿〔第1稿のこと——引用者〕の仕事を、利潤の平均利潤への転化にあてられた第2章から始めた。このことを示しているのは、第2章のページ番号づけがあとから、おおかた、第1章を書いたのちに行なわれた、という事実である。つまりマルクスは、はじめ第2章草稿の2つ折り全紙に、鉛筆でラテン文字の「a」から「l」までのページ番号をつけておいたのである。」²⁾

そして、このなかの「第2章草稿の2つ折り全紙」に注記して、次のように述べている。

「第3部第2章の全体が、第1部の『第6章』と同様に、「1864年」の透かしのある2つ折りの同じ全紙に書かれている。すでに書きあげられていた第2章の諸ページにあとからページ番号をつけるときに、その番号の一部が、反対のページに跡をつけてしまっている。」³⁾

この注で言っているのは、第1に、おそらく、第1部『第6章。直接的

生産過程の諸結果』のために用いられた紙にも「1864年」という透かしがある、だから、第3部第2章は第1部第6章に続けて書かれたのだ、ということであろう。第2には、番号をあとからまとめてつけた証拠に、ページによってはインクが乾かないうちにめくったために、書いたばかりのページ番号が対向ページに移ってしまっている、というのであろう。

上記論文は、これらの考証に続けて次のような推論を行なっている。

「興味をよぶのは、1861—1863年草稿に含まれている将来の『資本論』第3部の全材料のうちで仕上げの程度が最も少いのが、まさに、利潤の平均利潤への転化にかんする節だということである。それというのも、それが書かれたとき（1862年12月、ノート第16冊）には、マルクスはまだ、この問題を競争にかんする特殊研究の枠内でもっと詳しく考察するつもりでいたのだからである。1863年1月になって（ノート第18冊で）ようやく将来の第3部のまさに第2章のもっと詳しいプランが現われたのであった。おそらく、それだからこそ、第3部の執筆に着手したときマルクスは、まだ仕上げられていなかったこの章から始めたのであろう。」⁴⁾

以上の考証と推論はなかなか興味ぶかいものであり、また第2部第1稿の執筆時期の推定にもからむので、その当否は十分な検討を必要とするものであるが、ここではさしあたり、次の3点について述べておきたい。

(1) マルクスがはじめ a から l までの仮番号を第2章の各全紙につけておき、のちに第1章のページに連続する数字でのページ番号を打った、ということは、十分に考えられることである。ただ、そうだとすると、第1章の最後の全紙（151—154ページを含む第35全紙）が第2章の a—l の全紙と同じ紙であることをどう考えるのか、という問題が生じる。既述のように、この最後の全紙のまえまでにマルクスは2種の紙を使っている。したがって、第2章のあと第1章にもどってこの2種の紙を使ったあと、ふたたび1枚だけ、第2章で使ったのと同じ紙を使って第1章の最後を書いた、ということになるが、それはとてもありそうにないことである。この

点だけとると、第1章を書いたあと、第1章で使った最後の紙と同じ紙を使って第2章を書いた、と考えるほうが合理的であるようにも思えるのである。

しかし、他方、第1章の最後の全紙に書かれているのは、第1章への補遺ないし覚え書とみるべきものであって、しかもそのまえの全紙に3ページの空白を残している。これは、最後の4ページがそのまえの137ページに続いて一気に書き継がれたのではないことを示している。そして、この4ページと第2章とが同じ紙に書かれていることは、この4ページが第2章に着手する直前に、あるいは第2章執筆中のどこかで、あるいは第2章に一応のしめくりをつけた（つまり a-1 の全紙を書いた）直後に書かれたものであることを示唆している。そうであるならば、この1枚の全紙の存在は、さきの4筆者の推論と矛盾するものではなくて、むしろそれを補強することになるかもしれない。あるいは、この全紙には左肩に仮ページがついていないことから、第2章の a-1 の仮ページをつけたあとに、つまり第2章を書いたあとにこの全紙を書き、そのあと第1章に移った、とみることもできるかもしれない。さらに、この全紙の直前の第34全紙におけるページ番号の異常な飛び（137, 139, 140, 150——あとの3ページは空白）も、たんなる誤りなのではなくて、執筆順のこうした転倒に関係がある意識的なものかもしれない。

(2) さきにみた注のなかでは、「1864年」の透かしのあることが、『第6章。直接的生産過程の諸結果』の直後に第3部第2章が書かれた1つの証拠であるかのように述べられているが、これはまったく意味のないことと言わねばならない。「1864年」の透かしのある紙に書けるのは1864年以降だという意味で、これによって執筆の上限を確定することは可能であるが、この年にこの紙が使われたとみるができないのはいうまでもない。現にこの第3部に使われた紙に年の透かしがはいっているものを拾ってみても、1862年（第110—116, 118, 119, 137, 138, 140, 141全紙）、1863年（第29—34, 117, 135全紙）、1864年（第35—58, 106—109全紙）、

の3年間にわたっているのであり、また当の第2章のまえの第1章後半（第29—34全紙）には1863年の透かしのある紙が用いられているのだから、この透かしのみによるなら、第1章後半は第2章後半よりもまえに書かれたのだと言わなければならなくなるであろう。もっとも、『諸結果』に用いられた紙と第3部第2章に用いられた紙とがサイズおよび紙質においてまったく同じものであるとすれば、これは筆者たちの推論をささえる最有力な証拠となるであろうが、上記の注の記述はそういう意味に読めそうもない。

(3) 同じく上記の注では、対向ページにページ番号のインクが移っている箇所があることをもって、いちどにページ番号が書かれた証拠としている。たしかに、たとえば172ページと173ページ（第40全紙の内側2ページ）では相互のインクが移りあっていること、したがって、この両ページ番号が同時に書かれたものであることを示している。しかしはたして、マルクスはいつでも普通は前ページ本文を書いたのちに次ページのページ番号をつけていたのだ、と確定的に言えるのであろうか。数ページないし対向2ページにまずページづけをしてから本文を書く、あるいはその逆、という場合がなかった、と言えるのであろうか。これはまったくの傍証にしかかなりえないであろう。

さて、この第3束については、さらにいくつかのことを述べておこう。

まず、現行版では「競争による一般的利潤率の均等化。市場価格と市場価値。超過利潤」となっている、第10章の表題についてである。これは草稿では、第2章の3)にあたるが、その表題が、「3) 一般的利潤率の均等化のための競争。市場価格と市場価値。超過利潤」となっていることはすでに示した。ここでは、「競争による一般的利潤率の均等化」ではなくて、「一般的利潤率の均等化のための競争」となっている点が注目し値するほか、「市場価格と市場価値」のうちの「市場価格」と「市場価値」とが現行版ではどちらも複数になっているのに対して、草稿では「市場価格」が複数、「市場価値」が単数となっているという違いがみられる。

ところで、この3)は草稿178ページの1行目から始まるのであるが、このまえのページの177ページの1行目にも、じつは、3)の表題がいったん書かれたのち、鉛筆で抹消されているのである。これは、176ページの下方でいったん2)を終えて、177ページから3)にはいるつもりで表題を書いたが、その直後に、2)にもうすこし書き加えることにして、この表題を消し、176ページの下の方の空いている部分を埋めたいうでさらに177ページを書き、2)を終えた、ということであろう。176ページはMEW版179ページの本文の下から3行目、borniert ist, のところまで、そしてそれ以降第9章の末尾までは草稿177ページに書かれている。ここで注目されるのは、その表題がこれまた、178ページの表題と微妙に違っていることである。すなわち、ここでは、「3) 競争と一般的利潤率への均等化、市場価格と市場価値、超過利潤」3) Konkurrenz u. Ausgleichung zur allgemeinen Profitrate, Marktpreise u. Marktwert, Surplusprofit. となっているのである。「競争と一般的利潤率への均等化」の部分では、「競争と」となっていることのほか、「一般的利潤率の均等化」ではなくて「一般的利潤率への均等化」となっていることが目立つ。現行版の「競争による一般的利潤率の均等化」の場合であろうと、178ページの「一般的利潤率の均等化のための競争」の場合であろうと、どちらも、競争が一般的利潤率を均等化する、と読むのが普通であろう。しかし、第10章の本文での叙述から明らかのように、一般的利潤率＝平均利潤率は均等化の結果成立するものであって、均等化されるのは各生産部門の特殊の利潤率である。そこで、この表題のなかの「一般的利潤率の均等化」をどのように読むかが問題となる。これは各資本の個別的利潤率にたいする生産部門一般の利潤率のことで、内容的には各生産部門の特殊の利潤率をさしているのだという解釈もありうる。しかし、マルクスが通常一般的利潤率という言葉で考えていたものが平均利潤率であったことは明らかであったから、肝心の第10章の表題で、通常の使いかたと違う使い方で「一般的利潤率」としている、と考えるのには無理が感じられる。エンゲルスが——不適切に——つけた表題

なのではないか、とも考えられる。たしかに、現行版の表題にはエンゲルスの手が加わっているが、しかし、草稿の3)の表題がわかってみると、ここでもやはり「一般的利潤率の均等化」と書かれている。かつて、『マルクス経済学レキソコン』①「競争」の「栞」のなかでこのことを問題にしたことがあった。そのときわたくしは、ドイツ語の2格でも——日本語でもありうるように——「への」という意味をもちうるのではないかと、そして第10章の表題の場合にはそのようにとるほかはないのではないかと考えたのであった⁹⁾。こんどの177ページでの「競争と一般的利潤率への均等化」という異文は、「一般的利潤率の均等化」というのも、じつは「一般的利潤率への均等化」を意味するものであったことをはっきりさせたといえるであろう。このほか、抹消された表題の方では、3つの部分がプントではなくてコンマで切られている、という違いがある。

さて、177ページの表題も178ページの表題も、現行版の表題と同様に、最後が「超過利潤」となっている¹⁰⁾。利潤率の均等化は、超過利潤をめざす諸資本の競争によって達成されるのであるから、この表題部分も3)の全体にかかわると言ってもよいであろうが、しかし、3)の最後の部分には、「超過利潤」Surplusprofit という表題が見いだされる。現行版の第10章の最後の2つのパラグラフは横線でその前の部分から区切られているが、草稿ではこの2パラグラフにあたる部分の前(195ページ11行目)に、上の表題がつけられている。全体の表題との関連が考えられるべきであろう。

なお、既述のように、第2章の末尾には、あとから202 a, 202 b の両ページが書き加えられている。202 a ページは、現行版の「第12章 補遺」の「I. 生産価格の変動をひき起こす諸原因」にあたるが、表題はたんに「生産価格への補遺」Nachtrag zu d. Produktionspreissen. となっている。202 b ページには、「この部の第1章から第2章への移行への補遺」Nachtrag zum Uebergang aus Capit. I in c. II dieses Buches. という表題のもとに、次のように書かれている(リュベールはこの部分の前半を、彼の『資本論第2巻資料』の第3部第1章末尾の「補遺」の第1パラ

グラフに使っている?)。

「次のことはすでに考察済みである。——1)生産様式の変化とそれによる資本の構成の変化, 2)生産様式が不変である場合の, 不変資本と可変資本との割合の変化, すなわち, それらの相対的な大きさが不変である場合の, 不変資本または可変資本の形成にはいる諸商品の価値変動によるその変化, 3)生産様式の変化と不変資本および可変資本の諸要素の価値の変化, 言い換えれば, 両者の〔同時的な〕変化, 等々。

ここで1つの資本の有機的構成の内部での変化として考察されたことは, 同じく, 異なった生産諸部門の諸資本のあいだの有機的構成の相違として現われる(自己を貫く)ことができる。

第1に, 1個同一の資本の有機的構成の変化に代わって, 異なった諸資本の有機的構成の相違。

第2に, 同一の資本の2つの部分の価値変動による有機的構成の変化〔に代わって〕, 異なった諸部門の諸資本にとっての, 充用される機械, 原料, 等々の価値の相違。このことは, 部門が異なっても労賃は等しいことが前提されている可変資本については妥当しない。異なった諸部門における異なった労働日の価値の相違は, ここでの問題には関係がない。金細工師の労働が農業労働者の労働よりも高価であれば, 金細工師の剰余〔労働〕時間は, 同じ割合で, 農夫の労働よりも高い価値をもつのである。」

第3章については, ここでとくに記すことはない。

- 1) 佐藤, 前掲論稿(1), 127ページ。
- 2) В. Выгодский, Л. Миськевич, М. Терновский, А. Чепуренко, *О периодизации работы К. Маркса над «Капиталом» в 1863—1867 гг.*, стр. 104. 邦訳, 205—206ページ。「2つ折り全紙」двойные листыの部分が, 上の邦訳では「2枚のボーゲン」となっているが, これでは原文の意味がとれない。続く注のなかでの「2枚のボーゲン紙」と訳されているところも同様である。次注, 参照。
- 3) 同前, 同ページ。上の邦訳ではこの箇所は次のようになっている。

「第3部第2章全体は, 『第6章』と同じすかしの入った2枚のボーゲン

紙に書かれている [Вся II глава III книги написана на таких же двойных листах с водяным знаком «1864», что и «Глава шестая» I книги]。第2章のすでに書かれたページの後続のページづけのさいには、[ири последующей нумерации], 裏ページ [противоположные страницы] にまで部分的に数字の痕跡がのこっている。(前掲邦訳, 206 ページ)

4) 同前, 同ページ。

5) 「マルクス経済学レキシコンの葉」 No. 1, 久留間敏造編『マルクス経済学レキシコン』①「競争」, 大月書店, 1968年, 付録, 5—7ページ。

6) 佐藤氏の紹介では, どういうわけか, この「超過利潤」が欠落している。佐藤, 前掲論稿(1), 126ページ。

7) Rubel, *Matériaux*, p. 933.

4 第4束について

この束は, 76枚の全紙(うち3枚は半切り)を含む, 第1稿中の最も厚い束である。「第4章。商品資本および貨幣資本の商品取扱資本および貨幣取扱資本への, すなわち商人資本への転化」*Viertes Kapitel. Verwandlung von Waarencapital u. Geldcapital in Waarenhandlungscapital u. Geldhandlungscapital od. in kaufmännisches Kapital.*、「第5章。利子と企業利得¹⁾(産業利潤または商業利潤)とへの利潤の分裂。利子生み資本」*Fünftes Kapitel. Spaltung d. Profits in Zins u. Unternehmungsgewinn. (Indust. od. Comm. Profit). D. Zinstragende Capital.*、「第6章。超過利潤の地代への転化」*Sechstes Kapitel. Verwandlung v. Surplusprofit in Grundrente.*、の3章がこの束に含まれている。

この束は, 73枚の完全な全紙のほか, 3枚の2分された全紙を含み, 計298ページから成っている。しかし, 一方では, 第99全紙で386—389ページが, 第101全紙で399ページが, 第122全紙で479ページが, それぞれ飛ばされており, 他方では, 第69全紙に283 a ページが, 第80全紙(半切り)に325 a, 325 b ページが, 第88全紙(半切り)—第90全紙に352 a—352 j の10ページが, 第106全紙(半切り)に417 a, 417 b ページが, それぞれ

あり、また第84全紙の4ページ目、340ページと341ページのあいだにページ番号を欠いたページがあり、第130全紙の4ページ目の513ページは重複ページであり、最後の第134全紙の4ページ目がページ番号もつかない白紙となっている。そのため、ページ番号のある最終ページは、528ページ（第134全紙の3ページ目）となっている。半切りとなっているのは、第80、88、106全紙の3枚であるが、このうち、第80、88全紙は、同じ全紙を2分してつくられたものであることが明らかである。中央の線よりやや右よりのところで切ったために、第80全紙は2つ折りよりやや大きく、第88全紙はやや小さくなっており、両者の切り口はぴったり一致する。

第4章は第59全紙から第69全紙まで、第5章は第70全紙から第102全紙まで、第6章は第103全紙から第134全紙までであるが、このうち、第4章と第5章のすべてと第6章の最初の3枚の全紙（第59—105全紙、243—417ページ）は、まったく同一の紙に書かれている。すなわち、サイズ432×342mmの2つ折り、無野でやや薄い青色のあまり上質でない薄い紙、透かしははいていない。第106—109全紙（417a—429ページ）は、サイズ404×323mmの2つ折り、無野、紫色で、透かしは E. Towgood 1864 と各半切りに8本の並行線である。第110—113、115—116、118—119全紙（430—445、450—457、462—469ページ）は、サイズ398×329mmの2つ折り、9.5mm 間隔の野が34本あり、クリーム色で、透かしは Johnsons Improved Extra 1862 と図柄である。第114全紙（446—449ページ）は、サイズ398×329mmの2つ折り、9mm 間隔の野が34本あり、クリーム色の上質紙で、透かしは J WHATMAN 1862 と 28mm 間隔の平行線である。第117全紙（458—461ページ）は、サイズ400×328mmの2つ折り、9mm 間隔の野が34本あり、クリーム色の上質紙で、透かしは PIRIE 1863 と 26mm 間隔の平行線と図柄である。第120—134全紙（470—528ページ）は、サイズ406×326mmの2つ折り、無野でクリーム色、透かしは 27.5mm 間隔の平行線である。

さて、この束ではなによりもまず、最初の243ページに書かれた第4章

の表題が注目に値する。といっても、さきに示したその最終の姿ではなく、そこにたどりつくまでのプロセスである。残されている筆跡から、それがある程度まで読み取れるのである。

マルクスは「第4章」*Viertes Kapitel.*の下に、まず *Das Waarenhandlungscapital u. das Geldhandlungscapital. Spaltung von Profit in Zins u. industriellen Profit (Unternehmungsgewinn). Das Zinstragende Capital.* (商品取扱資本および貨幣取扱資本。利子と産業利潤(企業利得)とへの利潤の分裂。利子生み資本)と書いた。そのあと、これに2つの訂正を加えている。第1に、最初の *Das* を消してそこに *Verwandlung von Waarencapital u. Geldcapital in* と書き加え、また *das Geldhandlungscapital* の *das* を消して *Geldhandlungscapital* のあとに *od. in kaufmännisches Kapital* と書き加えた。この修正はすべてインクでなされている。この結果、「商品取扱資本および貨幣取扱資本」が「商品資本および貨幣資本の商品取扱資本および貨幣取扱資本への、すなわち商人資本への転化」に変わった。第2に、鉛筆で、*Spaltung von Profit in Zins u. industriellen Profit (Unternehmungsgewinn). Das Zinstragende Capital.* (利子と産業利潤(企業利得)とへの利潤の分裂。利子生み資本)、の部分消した。いうまでもなく、前者が表現上の推敲であるのになたいして、後者は、第4章になにを含めるかというプラン上の重大変更である。この両者が別の時点で行なわれたらしいことは、前者がインクで、後者が鉛筆でなされていることからわかるが、どちらが先に行なわれたものであるのかは判断できない。後者がインクでなく鉛筆でなされているところから、表題を書きつけたときの修正ではないだろうとも考えられるのであるが、しかし、すでにみた第2章中の3) (現行第10章)のための表題の、177ページでの、抹消も鉛筆で行なわれている——これはその場での訂正の可能性が強い——なのであって、断定はできない。いずれにせよ、ここで確認できるのは、マルクスが、第3部のこの第4章を書き始めた時点でも、まだ、この章で商業資本と利子生み資本との両者を論じるつもりでいた、と

いうこと、したがって、この両者を2つに分けて商業資本を第4章（現行版第4篇）で、利子生み資本を第5章（現行版第5篇）で取扱うという構想は、この第4章を書いている途中に確定された、ということである。

さきに触れた4人の筆者による共同稿では、第2部の第1稿が、この第4章の執筆の途中で、これを一時中断して書かれたものだとの考証がなされている²⁹。そのなかで筆者たちが、一方で、『資本論』第2部の「第1稿」が書かれたのは、『資本論』第3部の執筆の過程でこの部の第4章が第4章と第5章とに分割されるよりも前であった」と言い³⁰、しかも他方で、当の第4章の執筆にはいったのちに第2部第1稿執筆のための中断が生じた、とみている³¹のは、一見矛盾しているようであるが、じつは第4章にはいったときにはまだ「第4章と第5章とへの分割」がなされていなかったわけなのである³²。

それでは、この変更は第4章のどこを執筆しているときに決定されたのであろうか。もし上記4筆者による、第2部第1稿のための執筆中断箇所の推定が正しいとすれば、第4章を第4章と第5章とに分けることを決めたときの執筆箇所をもある程度まで限定できることになる。というのは、第2部第1稿では、その最後まで、まだ、商業資本と利子生み資本の両者を第4章で取扱うプランを前提していたことが明らかなのであって³³、第3部の執筆を中断して第2部第1稿を書き終えたのちに、はじめて第4章を2つの章に分割することが決められたはずだからである。4筆者によれば、その中断箇所は、第3部第1稿の256—275ページのあいだのどこかである。その論拠は、第1に、256ページでは（また243ページでも）、マルクスは流通費にかんする節として第2部第1章の§3に言及しているが、これは第2部第1稿本文の区分には一致しておらず、その執筆のために作られたプランの区分に一致しているのであって、このことは256ページ執筆中には第2部第1稿本文はまだ書かれていなかったことを意味している。他方、第2に、「マルクスは「第1稿」のなかで、金銀のもつ貨幣資本としての機能能力という問題の考察は第3部第4章に属することに触れてい

るが、しかしそのさい、この問題がそもそも『資本論』のなかで解明されるものかどうかについて疑念を表明している。にもかかわらず、この問題は第3部草稿の第4章の275—278ページで分析されている⁷⁾。だから、第4章の275ページにかかったときには、すでにマルクスはこの問題に決着をつけていたのであって、このことは、第2部第1稿がそれ以前に書かれていたことを意味している。以上が、256—275ページのあいだのどこかで第2部第1稿が書かれたという推定の論拠である。もしこの推定が正しいとすれば、すくなくとも、第4章の256ページまでは、マルクスはまだ第4章を2つの章に分割するつもりでなかった、ということになる。

しかし、この2つの推論のどちらにも疑問がある。

第1に、第3部第1稿第4章中の243ページと256ページとで流通費にかんする節として第2部第1章§3をあげていることが、第2部第1稿をまだ書いていない証拠になるのかどうかについてである。たしかに、第2部第1稿の本文では、「第1章。資本の流通」は、「1) 資本の諸変態」, 「2) 流通時間」, 「3) 生産時間」, 「4) 流通費」, の4節に分けられており⁸⁾, 流通費は4)で論じられている。また、同稿の表紙に書かれたプランでは、「3) 流通費」となっており⁹⁾, たしかにこのほうが243ページと256ページでの記述に一致している。しかし、4筆者の推論が成り立つためには、このプランが本文にさきだって書かれたこと、そしてそれが本文執筆中に修正されたことが確実でなければならない。この点について筆者たちも、また第2部草稿について特別に論じた、4筆者のうちのひとりチェプレニコ¹⁰⁾も、それをほとんど自明のこととしているようである。しかし、わたくしのみるところでは、それはそれほど自明のことではない。それどころか、むしろ逆に、わたくしは、表紙のプランの方が本文のあとに——すくなくとも第2章執筆後に——書かれたことが確実であると考える。この点についてはすこし立ち入って述べる必要があるだろう。

まず、第2部第1稿の本文の第1章および第2章の表題を掲げよう¹¹⁾。

第2部。資本の流通過程。

第1章。資本の流通。

- 1) 資本の諸変態。
- 2) 流通時間。
- 3) 生産時間。
- 4) 流通費。

第2章。資本の回転。

- 1) 流通時間と回転。
- 2) 固定資本と流動資本。回転循環。再生産過程の連続性。
- 3) 回転と価値形成。

Zweites Buch. Der Circulationsproceß des Capitals.

Erstes Capitel. Der Umlauf des Capitals.

- 1) Die Metamorphosen des Capitals.
- 2) Die Circulationszeit.
- 3) Die Productionszeit.
- 4) Circulationskosten.

Zweites Capitel. Der Umschlag des Capitals.

- 1) Umlaufszeit u. Umschlag.
- 2) Fixes u. circulirendes Capital. Umschlagscyclen.
Continuität d. Reproductionsprocesses.
- 3) Umschlag u. Werthbildung.

次に、同稿表紙のプランを掲げよう¹²⁾。

第2部。資本の流通過程。

第1章。資本の流通。

- 1) 資本の諸変態。貨幣資本、生産資本、商品資本。
- 2) 生産時間と流通時間。
- 3) 流通費。

第2章。資本の回転。

- 1) 回転の概念。

- 2) 固定資本と流動資本。回転循環。
- 3) 回転時間が生産物形成および価値形成ならびに剰余価値の生産に及ぼす影響。

第3章。

Zweites Buch. Der Cirkulationsprozeß des Kapitals.

Erstes Kapitel. Die Cirkulation des Kapitals.

- 1) Die Metamorphosen des Kapitals. Geldkapital, Productives Kapital, Waarenkapital.
- 2) Produktionzeit und Umlaufzeit.
- 3) Die Cirkulationskosten.

Zweites Kapitel. Der Umschlag des Kapitals.

- 1) Begriff des Umschlags.
- 2) Fixes Kapital und Cirkulirendes Kapital. Umschlagscyclen.
- 3) Einfluß d. Umschlagszeit auf Product- u. Werthbildung u. Produktion d. Mehrwerths.

Drittes Kapitel.

もし、プランが先に、本文が後に書かれたのだとすると、プランのなかの第1章「2) 生産時間と流通時間」が、本文で「2) 流通時間」と「3) 生産時間」とに分けられたことになる。ところが、本文の3)では、いったん「資本の回転」と書いたのち、これを「生産時間」と直しているのである¹³⁾。これはたんなる書き誤りの修正ではない。この3)のなかの49ページの注のなかでマルクスは次のように書いている。

「第1章のこの第3節の全体にわたって、第2節で流通時間を考察したのと同じやり方で、生産時間は単純に考察すべきではないか、という問題がある。とにかく第2章が「資本の回転」と題されるのだから、資本の流通のこの特定の形態にかんすることは、すべて第2章に含め、そして第1章は、やはり「資本の流通」と題されているのだから、ここでは、資本の流通の一般的契機だけを分析すべきではないか？ こうする

のがたしかに最善であるように思われる。」¹⁴⁾

つまり、マルクスはこの3)のなかで、生産時間固有の問題だけでなく、資本の回転についての一般的規定を与えているのである。マルクスはこれを反省して、回転の概念については、「第2章。資本の回転」の冒頭で論じるように変えることを、ここですでに考えている。そして、第2章の「1) 流通時間と回転」の冒頭で、「さて、前章の第3節で先どりして回転の一般的概念について述べたことを、ここにもってくるべきである」、として、第1章の3)の内容の一部をここに移すことを明言している¹⁵⁾。ところが、表紙プランでは、「第2章。資本の回転」の1)が端的に「回転の概念」となっている。こうしたプランをすでにもっていながら、本文で上にみたような試行錯誤をするとは考えにくい。

それどころか、そもそも第1稿を書きはじめたときに「第2章。資本の回転」とするプランがあったことさえ、疑わしいのである。28ページでマルクスは、「この規定の重要性は、資本の回転(本章の§3)のところで明らかになる」¹⁶⁾、と書いているが、これはさきに述べた、3)の表題の「生産時間」が「資本の回転」を消して書かれたものであることと完全に符合している。第1章3)の表題も第2章の表題もともに「資本の回転」とするプランがあったのだとは考えにくいのではないだろうか。そうだとすると、第2章を「資本の回転」とすることに決めたのが、第1章3)の表題を書いたから、さきにみた注を書くまでのあいだだった、ということになるだろう。そうだとすれば、表紙プランのような明確な構成が、第1稿本文に着手する以前にあったとはとうてい考えられない。逆に言えば、このようなプランのあとに、第1章のなかに、「回転の概念」を与えるような「3)資本の回転」という節をおく変更がなされたとはほとんど考えられない。

また、第2稿本文ではたんに「資本の諸変態」となっている第1章1)の表題が、表紙プランでは、そのあとにさらに、「貨幣資本、生産資本、商品資本」を加えたものとなっている。これも、本文では省いているのだと簡単にみすごすことができない箇所である。第1稿の第1章1)を注意

して読めばすぐわかるように、マルクスは、まさにこの部分の執筆中にこの3つの形態規定を、そしてとりわけ商品資本のそれを明確にしていくのである。第1稿では、マルクスは、現行版に採られた、のちの諸草稿とは違って、資本の循環形態のなかにその第2として、生産諸要因から出発してふたたび生産諸要因に終わる形態をあげている¹⁷⁾。これは、この生産諸要因を $G-W$ の W としてとらえて「商品資本」と呼んでいることと無関係ではない。当初から、そのように言うことにマルクスは慎重であったようにみえるが、しかし、5ページでは、「商品資本は、 W および W' として、過程の前提およびその結果として、前貸しおよび回収として、二重に現われる」¹⁸⁾、と言い、また6ページでも、「貨幣資本が転化した姿である商品資本 W は、労働過程の実体的な諸要因を表現しており」云々、と書いている¹⁹⁾。しかし、次第に、生産諸要因の形態にある資本を、生産資本と区別して商品資本と呼ぶことに問題があると考えていったように思われる。そして、29ページにいたって、

「商品資本と貨幣資本とは、本来的な流通部面の内部にある資本を、生産資本としての、つまり本来的な生産部面の内部における資本の存在形態としての自己から区別するところの、資本の2つの形態である。両形態は、ここでやや詳細に規定しておかなければならない」、

と、資本の3形態の明確な区別を述べたのち、まず、「商品資本。 $W'-G$ 」という表題のもとで、商品資本とは、価値増殖の結果としての剰余価値をはらみ、これから実現されるべき商品形態にある資本であることを詳述している²⁰⁾。そして32ページでは、さきの $W-P-W'-G'-W$ という第2の循環形態に疑問符をつけるかのように、I, II, IIIとして、貨幣資本の循環、生産資本の循環、商品資本の循環、の3形態だけをあげている²¹⁾（ただし、さきの第2形態をまだ捨てさったわけでないことは、たとえば51ページでこの形態に言及している²²⁾ ことからわかる）。このような第1章1)での記述からみると、「資本の諸変態」に「貨幣資本、生産資本、商品資本」とつけ加えたのは、まさにこの1)での執筆過程の結果だった

ことがわかるのである。

総じて、表紙プランの諸項目の方が練り上げられたものとなっていることを感じさせる。とくに第2章の「3) 回転と価値形成」という表題にたいして、プランの「3) 回転時間が生産物形成および価値形成ならびに剰余価値の生産に及ぼす影響」という表題は、明らかに、のちの第2稿での表題——「3) 回転の相違が資本の価値増殖等々に及ぼす影響」(第2稿本文)、「3) 流動(可変および不変)資本の回転一般にかんする諸法則」(同稿表紙プラン)——への過渡をなすものである。

以上の推論を支えるもうひとつの材料がある。それは、第2部第1稿の次に、ある程度までまとまった分量で、第2部の仕上げ稿として書きかけられた第2部第4稿の本文のなかに見られる表題である。節までの区分をそこから拾うと、次のようになっている²³⁾。

第2部。資本の流過程。

第1章。資本の流通。

- 1) 資本の諸変態——貨幣資本、生産資本、商品資本。
- 2) 生産時間と流通時間。
- 3) 流通費。

第2章。資本の回転。

- 1) 回転の概念。
- 2) 固定資本と流動資本。(設備資本と経営資本)。

Zweites Buch. Der Cirkulationsprozeß des Kapitals.

Erstes Kapitel. Der Umlauf des Kapitals.

- 1) Die Metamorphosen des Kapitals : Geldkapital, Produktives Kapital, Waarenkapital.
- 2) Produktionszeit und Umlaufzeit.
- 3) Die Cirkulationskosten.

Zweites Kapitel. Der Umschlag des Kapitals.

- 1) Begriff des Umschlags.

2) Fixes Kapital und Cirkulirendes Kapital. (Anlagekapital u. Betriebskapital.)

第4稿は、第2章の2)の途中で中断しているが、みられるように、第2章の2)で「回転循環」がなく、そのかわりに「(設備資本と経営資本)」とあるほかは、さきの第1稿表紙プランと基本的に一致している。第1章の表題のなかの「流通」がプランでは Die Cirkulation, ここでは Der Umlauf となっているが、これもじつは、第4稿ではいったん Die Cirkulation と書いたのちにこれを Der Umlauf と訂正しているのであって、外見上第1稿の本文での Der Umlauf と一致しているようにみえるが、むしろその逆なのである。つまり、マルクスは、第1稿本文では Der Umlauf としたが、Die Cirkulation の方がいいと考えて、プランで変更し、それにもとづいて第4稿でいったん Die Cirkulation と書いたが、それをまた Der Umlauf にもどしたのである²⁴⁾。

ただ、表紙プランが第1稿本文以前のものではないかと思わせる箇所がひとつある。それは、このプランでは第2部第3章については、ただ「第3章」という番号しか書かれていない、という点である。これが4筆者たちに、このプランが本文に先行するものと思わせたのかもしれない。しかし、この点については、2つの可能性を考えることができるであろう。ひとつは、このプランが第2章の執筆後、しかし第3章のまえに書かれたという可能性である。もうひとつは、それが第3章の執筆後に書かれたが、第3章のプランはこの章の末尾にすでに書いた²⁵⁾ので、繰り返すことを省いたという可能性である。わたくしは、綴りのちがいをからみて(注12および23参照)、表紙プランが第2部第1稿(さらに第3部第1稿)よりもあとのものであると判断しているが、いずれにしても、表紙プランが書かれたのが第2章の執筆後であることは確かだと考える。

以上のように、第2部第1稿表紙プランが第2部第1稿そのもののあとに、すくなくとも第2章のあとに、書かれたものであるとすれば、4筆者が、第2部第1稿本文未着手の証拠としてあげた第3部第1稿第4章中の

243, 256ページは、むしろ逆に、この時点ではすでに第2部第1稿の第2章までは書き終わられていたことを示していることになる。しかも、もし第2部第1稿と第3部第1稿とが並行して書かれていた、というありそうもない事態を考えなければ、第2部第1稿の全体がすでに書き終わられていたことが示されている、と言ってもよいであろう。

第2に、4筆者が、すくなくともここではすでに第2部第1稿が書き終わられていた、としてあげている箇所は、もちろん上の243, 256ページよりもあとであるから、これらのページの執筆時点よりまえに第2部第1稿が書き終わられていたことが明らかとなった以上、その当否を論じるまでもないのであるが、しかし、その箇所がはたしてそうした論拠たりえているか、ということについて、一言しておくことにしよう。

筆者たちが第2部第1稿から引いているのは、第1章のなかで、「貨幣資本」について論じたのち、これに関連してとくに「貨幣資本の独自の2つの形態」について言及している箇所である。その第1の形態として、マルクスは次のものをあげている。

「1) 1国の商品資本のうちの1部分は、毎年、鉱山を有する諸国の金銀と（あるいは、そうでなければ有利な収益がみこめない場合には、鉱山をもたない諸国の金銀とさえ）交換される。それらは、貨幣材料として、それ自体が資本の、まず第1に貨幣資本の作用能力〔*Wirkungsfähigkeit*〕をもっている。このことのより詳しい考察は、第3部第4章（そもそもこの問題がこの著作で取り扱われうるとすればだが〔when at all this question can be treated in this work〕）に属する。」²⁶⁾

すでにみたように、4筆者は、「この問題は第3部草稿の第4章の275—278ページで分析されている」、と言い、そのあとに「（『資本論』第3巻第19章、参照）」と書いている²⁷⁾。現行版の「第19章 貨幣取扱資本」はたしかに、第3部第1稿の275—278ページから採られている。しかしながら、上でマルクスが述べているのは、はたして貨幣取扱資本のことだったのであろうか。そうではなくて、ここで考えられているのは、貨幣材料を

生産する資本の生産物がそれ自体として貨幣資本の形態にあり、かかるものとして機能しうる、ということであろう。そのような資本についての論述は、第3部第4章（現行第4篇）では、「貨幣取扱資本」にかんする275—278ページのなかだけでなく、総じてこの章全体のどこにも見出だされない、と言わなければならない。4論者のこの部分の援用は、なんの証明力ももっていないと言わざるをえない。

さて、第4章の第1ページである243ページで「流通時間」にかんする「第2部第1章第3節」に言及していることは、第2部第1稿がすでにこの章にはいる以前に書き終えられていたことを示唆している。その時点の考証はここでの問題からは離れすぎるので、立ち回らないことにするが、4筆者のいうように、第3部第2章執筆中にはまだ第2部第1稿は書かれていなかった、という結論は動かしがたいもののように思われる。4筆者はその証拠として、同章中の164ページにある、

「流通時間が利潤率にどの程度影響するか——この問題はここでは詳細に研究しないでおく（というのは、第2部はまだ書かれていないが、そこでこの問題が特別に考察されるはずだからである）」、
 という文章をあげているが²⁸⁾、さらにもっとあとの182ページ（MEW版では、190ページ、15行目、„ausbieten“と„Damit“とのあいだにあたる）では、次のように書いているのが注目される。

「[市場の概念は、その最も一般的なかたちでは、資本の流通過程についての篇で展開されなければならない。]」

[D. Begriff d. Markts muß in s. allgemeinsten Zügen entwickelt werden in d. Abschnitt über d. Circulationsprozeß des Capitals.]

第2部第1稿の第1章1)のなかの、さきにみた「商品資本。W'—G」という小見出しがつけられた部分の後半（32—33ページ）では、まさに、市場の概念がきわめて一般的なかたちで論じられている²⁹⁾。このことは、第3部第2章の182ページの執筆時点では、まだ第2部第1稿が書かれていなかったことを示している。したがって、いまここで言うのは、マル

クスは第3部第2章の182ページ以降のどこかで第3部第1稿の執筆を中断して、第2部第1稿を書き、それからふたたび第3部第1稿の仕事にもどったが、それは遅くとも、第3部第4章に着手する以前であった、ということである。

こうして、4筆者による、第2部のための執筆中断の考証は、第3部第4章執筆中のどこでこの章の2分割が決められたかということの推論には役立つことが明らかとなった。しかし、これとは別に、第4章の分割をきめたであろうと思われる範囲をせばめる材料がないわけではない。

まず、同章の260ページには、次のようなメモがある。

「注意。〔商人資本〔mercantiles Capital〕の特殊の蓄積は、商品取扱資本以外に貨幣取扱資本をも研究したあとではじめて考察したい。〕」

この覚え書きそれ自体では、「商人資本の特殊の蓄積」が貨幣取扱資本の研究のあとでなされることだけしかわからないが、この章の5)として、278ページに、次のように書かれている（5)はこれですべてである）。

「5) 商人資本の貨幣蓄積の特殊の形態は次章ではじめて考察される。」³⁰⁾

この5)と上のメモで考えられているものとは同一の事柄と見ることができるのではないだろうか。もしそのように見ることができれば、次の推定を許すものではないであろうか。すなわち、マルクスははじめこの問題を、第4章のなかで論じるつもりでメモのように記したが、のちに第4章を第4章と第5章とに分割したのち、もういちど同じことを、ただしこんどはその取扱われるべき場所を「次章」すなわち第5章と明記して、記したのだ、ということである。つまり、260ページ執筆中には、まだ分割がきめられていなかったという推測を許すように思われるのである。

他方、「4) 貨幣取扱資本」のなかの277ページ（MEW版、S. 332）では、次のように書いている。

「貸借の機能や信用取引が貨幣取扱業のそのほかの諸機能と結びつくようになれば、貨幣取扱業はもはや十分に発展しているわけである。

【といっても、このようなことはすでに貨幣取扱業の発端からあったのであるが。】これについてはあとではじめて論じる。というのは、われわれは次章ではじめて利子生み資本を展開するのだからである。」

ここではすでに、利子生み資本を論じる部分が第5章として独立させられることが明記されている。したがって、第4章を2つの章に分割することは、同章の260—277ページのあいだで最終的に確定されたのだとみることができよう。したがってまた、第4章の表題のうち、後半が鉛筆で抹消されたのも、この表題を書いた直後ではなくて、すくなくとも260ページ以降を書いているときであろう、ということになる。

以上で、第4章から利子生み資本にかんする部分が第5章として分離された時点についての考証を終わり、ふたたび、第3部第1稿の第3束の外形をみることにまどろう。

第4章は、全7節に分けられているが、そのうち、5)はさきにみたのが全文であり、6) (278ページ) および7) (279ページ) には表題がつけられていない。1)から4)までの表題は次のとおりである。「1) 商品取扱資本 (および商業利潤)」1) D. Waarenhandlungscapital (u. d. commercielle Profit.)³¹⁾ (243ページ) 「2) 商業利潤とその諸特質」2) Der commerciale Profit u. seine Eigenthümlichkeiten.³²⁾ (251ページ) この項の265、266ページは、ページ番号があるだけで空白となっている。これは、エンゲルスが、現行版 (MEW 版, S. 312 の注 39[a]) で、「原稿に2ページの空白があることは、この点をもっと立ち入って展開するつもりだったことを示唆している」と書いているところにあたる。「3) 商人資本の回転。諸価格」3) Umschlag d. mercant. Capitals. Preise. (268ページ) このなかの269ページに、「仮空の需要」fiktive Nachfrage という語がある (草稿では下線が引かれている) が、これが MEW 版『資本論』第3巻のどの版からか aktive Nachfrage と、正反対の意味になりかねぬ語に変わっていた (この点はもうずいぶんまえに種瀬茂氏から伺っていた)。草稿では明らかに fiktiv となっているので、MEW の誤植であったことがはっ

きりした³³⁾。「4) 貨幣取扱資本」4) Geldhandlungscapital. (275ページ) なお、これに続く5)6)7)からエンゲルスは「第20章 商人資本に関する歴史的事実」を作ったが、それについて、佐藤氏は、「リュベールは、第20章における本来の展開は、「主要原稿」の297ページの7)——現行版では337ページ、上から4行目の „Wir haben bisher“ 以下——から始まると述べているが、残念ながら私は確認しなかった」と書かれている。ここで氏が言われるように、7)はこの箇所から始まっているが、リュベールが書いていることは、内容的にみて、「歴史的部分」がこの7)から始まっている(そのまえの6)はまだそうではない)、といているにすぎないのであって、なにか外形的に「確認」が必要なことではなかったように思われる。

次に「第5章。利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)への利潤の分裂。利子生み資本」であるが、この部分は既述のように全文を掌握することができたので、別の機会に紹介するつもりであり、ここでは外形的なことだけをごく簡単に書いておこう。

まず、この章ではページ番号を書き変えたページが多いことが目立つ。前章の最後の2ページははじめ、その直前の283 a ページに続けて 283 b, 283 c と番号がつけられたが、それが 284, 285 と変えられ、それに続く本章の第1, 2 ページは、285, 286ページから286, 287ページに変えられた。300ページは230ページを直したものである(これは誤記を直したのであろう。このインキは前ページの299というページ番号の上に移っている)。361ページは81(381?)を訂正したもの。390—405 ページ(この章の最後の部分)では、奇妙な修正がみられる。というのは、この直前(第99全紙の1ページ目)が385ページであり、はじめいったんこれに続く番号が386から395ページまで書かれ、1 ページ(このページは、390→400→401という訂正を経て)飛ばして、396, 397, 395, 395 b (この4ページは第102全紙をなし、395 b ページは番号だけであとは白紙である)と番号がつけられていた。ところがどういふわけかこれらの番号のすべてを消し、390, 398, (399ページを飛ばして) 400—405 というページ番号を打ち直してい

るのである。その結果、385ページのあと、386—389ページの飛びができてしまった。この奇妙なページ番号のつけかえの理由はわからない。

第5章は、すでに佐藤氏が紹介されているように、現行版第21章から第24章まではおおむね第1稿にそっていて、その区分も同一である。1)から4)までの節区分は現行版の各章に対応している（ただし、3)は4)と、4)は5)と誤記されている³⁴⁾）が、ただ表題があるのは、「2) 利潤の分割。利子率。自然利子率」2) Theilung d. Profits. Zinsfuß. d. natural rate of interest., 「5) 利子生み資本の形態での 剰余価値および資本関係一般の外表面化」5) Veräusserlichung d. Mehrwerths u. d. Capitalverhältnisses überhaupt in d. Form d. Zinstragenden Capitals. の2つである。これに続くのは、現行版の「第25章 信用と仮空資本」にあたるところであるが、そこには「5) 信用。仮空資本」5) Credit. Fictives Capital. という表題がつけられている。そしてこのあと、なんらの区分番号ももたない小見出しなししそれに準じるものを除くと、317ページから392ページまで、まったく節番号を見いだすことができない。この部分はエンゲルスによって11の章にわけられており、「信用と仮空資本」という表題はそのなかの最初の章である第25章だけのものとされている。しかし、わたくしのみるところでは、「5) 信用。仮空資本」という表題は、そもそも、85ページに及ぶこの大きな部分の全体にかかるものである。393ページからは、第5章の最後の節「6) 先ブルジョア的なもの」6) Vorbürgerliches. が始まる。この節の番号は、リュベルもそう読んでいるように「6)」であろう。佐藤氏は、リュベルの読み方と異なることを注記されたうえでこれを「C)」と読まれている³⁵⁾。これにはなにか有力な根拠でもあるのであろうか。第5章は6節構成となっているとみるべきではないかと思われる。「5) 信用。仮空資本」の部分については、エンゲルスが第5篇の草稿全体について書いた言葉——「ここにはできあがった草案がないのであり、これから中身を入れるはずだった筋書きさえもなく、ただ仕上げの書きかけがあるだけであって、この書きかけも一度ならず覚え書きや注意書き

や抜き書きの形での材料やの乱雑な堆積に終わっている」³⁶⁾ ——がまったくびったりと当てはまる。ここには、エンゲルスによって利用されなかった部分（といっても、その多くは引用）がかなりあるのであるが、そのうち最もまとまった部分は、周知のように、「混乱」Die Confusion. と題する10ページである³⁷⁾。これは、352 a, 352 b ページからなる全紙半切り（これは既述のように 325 a, 325 b ページをなす半切りの片割れである）、352 c—352 f および 352 g—352 j ページの2枚の全紙、計2枚半の全紙から成っている。この部分が352ページに続けて書かれたものかどうかは判断できない。というのは、382ページは紙の下までいっばいに書かれているが、文章は完結しており、しかも、「混乱」は見出しをつけて352 a ページからまとめて書かれているのであって、このエピソードを含むページにはじめから 352 a, b…の番号をつけた可能性は排除できないからである。もちろん、あとからここに挿入した可能性もあるが、しかしそれも、次の第6章の12ページ目の417ページまでのあいだであろう。というのは、「混乱」が書かれている全紙はその前後とまったく同じものであり、それは第6章の3番目の全紙まで続いているからである。したがって、この「混乱」は、かりにあとから書かれたとしても、そんなにあとの時期ではないこと、おそらくはこの5)を書いているときにつけられたものであろうこと、が推定できるのである。この「混乱」の内容は別の機会に詳細に紹介したいと考えている。

「第6章。超過利潤の地代への転化」については、純外形的なことだけ、いくつか書いておく。「a) 諸論」 a) Einleitendes. の最後にあとからつけられたとみられる 417 a, 417 b の2ページの半切り全紙は、その次の「c) 絶対地代」 c) Die absolute Grundrente. (cの文字の上にはBが重ねがきされている³⁸⁾) のはじめの3全紙と同じものであり、したがってこの3全紙12ページを書いているときにつけられたことがたしかである。470, 471ページも、472, 473ページも全紙半切りとなっているが、この両者がはじめ1枚の全紙をなしていたこともたしかである。これは繰り返

返して開閉をしているうちに折り目から切れてしまったものだと思われる。第122全紙が含むページは、478、480、481、482の4ページであるが、480ページははじめ479と書いたものをよごしてしまい、そのうえに480と書き直したものであり、481ページははじめ480と書いたものを481と直したものである。482ページは最初からそのように書かれている。したがってこの全紙についてみるかぎり、内側の対向2ページのページ番号は同時に書かれ、4ページ目はその時とは別の、つまりおそらくはこの4ページ目にはいるときに番号が打たれたとみられる。2枚の半切り全紙となっている495、496ページの半切りと497、498ページの半切りとがもと1枚の全紙をなしていたことは、両方のよごれがつながることから確実である。513ページは誤って2ページつくられている。これもまた2枚の半切り全紙となっている522、523ページと524、525ページとは、透かしがつながることから、もと1枚の全紙をなしていたことがわかる。528ページは第134全紙の3ページ目であるが、ページ番号だけであとは空白、次のページはページ番号もない白紙であり、ここで第1稿の第4束は終わる。第6章の表題等については、佐藤氏がすでに書かれているところにつけ加えるものをもたない³⁹⁾。

- 1) 「企業利得」 *Unternehmungsgewinn* は、現行版ではエンゲルスによって「企業者利得」 *Unternehmergewinn* に変えられている。第1稿では、わたくしのみたかぎりでは、*Unternehmergewinn* は1箇所もなく、すべて *Unternehmungsgewinn* となっている。
- 2) В. Выгодский, Л. Миськевич, М. Терновский, А. Чепуренко, *О периодизации работы К. Маркса над «Капиталом» в 1863—1867 гг.*, стр. 104—105. 邦訳, 206—207ページ。
- 3) *Там же*, стр. 104. 邦訳, 205ページ。
- 4) *Там же*, стр. 104—105. 邦訳, 206—207ページ。
- 5) 4筆者の共同稿がなぜこの点にふれなかったのか、不可解である。
- 6) 第2部第1稿のあちこちにみられる第3部の篇別への関説によって、このことは確認できる。とくに、第2稿141ページ（前掲邦訳, 275ページ）では、「利子生み資本についての第4章」と明示的に書いている。
- 7) *Там же*, стр. 105. 前掲邦訳, 207ページ。

- 8) 第2部第1稿, 1, 41a, 46, 53の各ページ(前掲邦訳, 9, 79, 90, 105の各ページ), 参照。
- 9) 第2部第1稿, 表紙(前掲邦訳, 8ページ)。なお, 邦訳で, 草稿ページの記載を「0」としたのは不適切であった。これは解読文にあったものをそのまま採ったのであったが, やはり, 表紙およびその裏, とすべきところであった。
- 10) А. Ю. Чепуренко, *К Вопросу о датировке I-IV рукописей второй книги “Капитала” К. Маркса*, «Научно сообщения и документы по марксоведению», ИМЛ при ЦК КПСС, Москва, 1981, стр. 83.
- 11) 第2部第1稿の各所から。なお, 原文は, 草稿のフォトコピー(ЦПА ИМЛ, ф. 1, оп. 1, ед. хр. 1802)による。
- 12) 原文中の綴りが, 本文のなかの表題と各所で異なっているのに注目されたい。Circulationsproceß が Cirkulationsproceß に, Capital が Kapital に, Capitel が Kapitel に, Circulation が Cirkulation に, Production が Produktion に, circulirendes が cirkulirendes に, それぞれ変わっている。
- 13) 第2部第1稿, 46ページ。邦訳, 90ページ, 参照。
- 14) 第2部第1稿, 49ページ。邦訳, 96—97ページ。
- 15) 第2部第1稿, 57ページ。邦訳, 114ページ。
- 16) 邦訳, 58ページ。
- 17) 第2部第1稿, 4ページ。邦訳, 15ページ。
- 18) 邦訳, 17ページ。
- 19) 第2部第1稿, 6ページ。邦訳, 18ページ。
- 20) 第2部第1稿, 29—33ページ。邦訳, 59—68ページ。
- 21) 第2部第1稿, 32ページ。邦訳, 66—67ページ。
- 22) 邦訳, 102ページ。
- 23) 第2部第4稿, 1, 30, 35, 50, 53ページ。ここでの単語の綴りを, 前掲の2つの目次のそれと比べられたい。プランのそれが第4稿のそれとまったく一致していることがわかるであろう。
- 24) じつは, 第2部第1稿と第4稿とのあいだには, 第2部の冒頭部分の書き出しとして書かれた断稿がひとつある。これは明らかに第4稿を書くまえに書かれたもので, IISG に保存されている。第4稿はこの断稿の清書として書き始められたものである。この断稿は4ページしかなく, したがって, 第1章1)の冒頭の部分しか含んでいないが, その表題は次のようになっている。(本稿では Umlauf も Zirkulation も「流通」と訳しておく。)

第2部。資本の流通過程。

第1章。資本の流通。

1) 資本の諸変態。

Zweites Buch. Die Cirkulationsprozeß des Kapitals.

Erstes Kapitel. Die Cirkulation des Kapitals.

1) Die Metamorphosen des Kapitals.

みられるように、「流通」が Umlauf ではなくて Cirkulation となっている。つまり、プランとこの断稿と第4稿の最初の書きつけとの3つは、みな Cirkulation となっていたのである。また、1)の表題がたんに「資本の諸変態」となっているのも目をひく。さきのプランよりもまえにこの断稿が書かれた可能性もあるかもしれない。なお、この断稿については、本稿末尾の付論でふれるので、参照されたい。

ここでついでに、この Umlauf→Cirkulation→Umlauf と変わった、第1章の表題がその後どうなったかについて、一言しておこう。

第4稿に続くのは第2稿であるが、ここでは、まず表紙には、

第2部。資本の流通過程。

第1章。資本の流通〔Cirkulation〕

と書き、本文では同じく「第1章。資本の流通〔Cirkulation〕」と書いているが、その後にかかれたとみられる表紙プランでは「第1章。資本の循環」となっている。さらに、本文表題中の「流通」は、明らかに後年に「循環過程」に訂正されている。これに続くのは、1875年以降にかかれたと推定される第5稿とその前後の諸断稿であるが、ここではすでに、第2部の3篇構成が確立しており、その第1篇は「資本の循環過程」となっていて、これ以降の第6稿の断稿、第7稿でももう変わっていない。第2稿とその表紙プランとの先後関係がひとつの問題であるが、以上をまとめると、第1章（第1篇）の表題は次のような変遷をたどったことになる。

- ① 資本の流通〔Umlauf〕
- ② 資本の流通〔Cirkulation〕
- ③ 資本の流通〔Umlauf〕
- ④ 資本の流通〔Cirkulation〕
- ⑤ 資本の循環
- ⑥ 資本の循環過程

25) 第2部第1稿、150ページ。邦訳、294ページ。

26) 第2部第1稿、38ページ。邦訳、76ページ。なお、「貨幣資本の独自の2つの形態」のうちのもう1つの「形態」は、次のものである。

「(2) 貨幣資本の存在形態としての有価証券。この点については、本章の第3節で私が述べたことを見よ。」(第2部第1稿, 39ページ, 邦訳, 77ページ)

このなかで「本章の第3節」と言っているのは、第3節の末尾でマルクスが、「この同じ信用制度の発展こそが、株式会社等々の形成を通じて」云々、と書いているところ(第1稿, 52ページ, 邦訳, 104—105ページ)にかかわるのであろう。

草稿の39ページは上に引用した(2)の部分だけで、あとは空白となっている。のちにここにさらに書き加えるつもりだったのかもしれない。ともあれ、「貨幣資本の独自の2つの形態」はこれで終わり、草稿40ページからは、金属貨幣が資本主義的生産のなかで資本の運動に規定されて、あるいは貨幣資本として、あるいはたんなる流通手段として機能する、という問題に論及している。

ところで、この部分は、邦訳でもロシア語訳でも、草稿40ページだけで終わり、その次にすぐ「第2節. 流通時間」が始まっている。それは41aページで、このあと41, 42ページ、というように進んでいくことになっている。しかしこれは誤りであって、41ページは41aページの前にこななければならない。つまり、41ページは「第2節」ではなくて、「第1節」の末尾、上述の、資本主義的生産における金属貨幣の機能を論じた部分に続いているものなのである。邦訳の誤りは、ロシア語版に従ったために生じたものであるが、ここで訂正しておきたい。

- 27) В. Выгодский, Л. Миськевич, М. Терновский, А. Чепуренко, *О периодизации работы К. Маркса над «Капиталом» в 1863—1867 гг.*, стр. 105. 邦訳, 207ページ。
- 28) *Там же*, стр. 104, 邦訳, 206ページ。
- 29) 邦訳, 65—68ページ。
- 30) この1文は、現行版の「第20章 商人資本に関する歴史的事実」の冒頭の記事となっている。
- 31) この表題のなかほどの開き括弧は、u. のうえに重ねて書かれているように見える。もしそうだとすると、はじめ「1)商品取扱資本と商業利潤」と書き、そのあとでそれを「1)商品取扱資本(商業利潤)」と変えた、と読むべきであろう。
- 32) 佐藤氏はこれを „Der commerciale Profit in seinen Eigenthümlichkeiten“ (商業利潤の諸特質)と読んでおられる。そして注では、Rubelがわたくしと同じように読んでいることを記されている。わたくしには „in seinen“

142 『資本論』第3部第1稿について

ではなくて、やはり „u. seine“ にみえるのだが。佐藤，前掲論稿(1)，129，138ページ。

- 33) ベルリンの ML 研には、この点について質問状を出しておいたが、回答をもらえぬまま、IISG で草稿そのものを見ることになった。しかし、MEW 版もいずれ訂正されることになるであろう。
- 34) 佐藤，前掲論稿(1)，138ページ，注25，26，参照。
- 35) 同前，132，138ページ。
- 36) *Marx-Engels Werke*, Bd. 25, Berlin 1964, S. 12.
- 37) *Ibid.*, S. 13—14, 参照。
- 38) 佐藤，前掲論稿(1)，136ページ，参照。
- 39) 同前，134—136ページ，参照。

5 第5束について

この束には、「第7章。収入（所得）とその源泉」*Siebentes Kapitel. Revenuen (Einkommen) u. ihre Quellen.* が書かれている全紙が収められている。

この束は、12枚の完全な全紙と1枚の全紙半切りとから成っている。後者の半切りは別のところからもってきたものであるが、後述のように、たんなる挿入や追加ではなくて、その後のページはこの半切りのあとに続けて使われている。この半切りの表裏2ページには、マルクスがつけたページ番号(470, 471)があるが、それらは、この半切りが別のところにあつたときのもので、第7章のこの位置での前後のページとは無関係である。これをのぞくと、この第5束にはマルクスが書いたページ番号はひとつもない。上の半切り以外のすべての全紙には、エンゲルスがページ番号をつけている。ただし、各全紙の1ページ目および3ページ目だけで、それも3つのページでは欠けている。前第6章の、書かれている最後のページがマルクスの番号づけで527ページとなっているため——そのあとに528の番号のある白紙と番号のない白紙との2ページがあるにもかかわらず——、エンゲルスは528ページから番号づけを始めている。エンゲルスには、上

述の半切りがはいるべき位置がわからなかったらしく（リュペルはその原因を、この半切りがほかのところに移ってしまっていたからだ、としている）、この半切りの2ページにはページ番号をつけていない。528以下、530、532のように、1ページおきに番号をつけて、574まで進んでいるが、途中、534、538、540の各ページの番号は書かれていない。その理由は不明である。4ページある完全な全紙で、エンゲルスが番号をつけなかったページには、おそらくかつてモスクワ ML 研のためのフォトコピーを作成するさいに、第三者の手でページがつけられている。それらはすべて、NM 529のように、NM という記号とともに書かれている。上の半切りにも、マルクスがつけた470、471という番号以外にもページ番号がつけられているが、これについては後述する。

第1枚目の全紙（第135全紙、528—531ページ）は、サイズ401×328.5 mm の2つ折り、8.5 mm 間隔の野が34本あり、クリーム色で、透かしはPIRIE 1863のほか、25 mm 間隔の平行線である。この紙は、第6章のなかの第117全紙（458—461ページ）に酷似しているが、同じものであるとは確認できなかった。

それに続くのは、IISGでの現在の状態では、さきに述べた半切りの全紙（第136全紙）であるが、これについては後述しよう。

続く2枚の全紙（第137、138全紙、532—539ページ）は第110—113全紙（430—445ページ）、第115—116全紙（450—457ページ）、第118—119全紙（462—469ページ）と同じものである。なお、ここまでが、「1」三位一体的定式」に相当する。

その次の全紙は、すぐまえの全紙とサイズは同じであり、紙質も酷似しているが、無野で、透かしは27.5 mm 間隔の平行線だけである。

そのあとふたたび、さきの第137、138全紙と同じ全紙が2枚続く（第140、141全紙、544—551ページ）。

最後に、第142—147全紙（552—575ページ）は、サイズ408×325 mm の2つ折り、無野でやや厚口の紙で、透かしは27.5 mm 間隔の平行線だ

けである。

さて、さきに記したように、この束のなかでエンゲルスがページ番号を打たなかった唯一の半切り全紙は、現在、この束の2枚目になる位置におかれている。しかし、エンゲルスがこの草稿を使って現行第7篇第48章を編もうとしたとき、この半切り全紙がこの位置におかれていなかったこと、またしたがって、彼がこの草稿を後に遺したときにも同様であったことは、ほとんど確実である。エンゲルスは、この半切れの表側（470ページ）を、「第48章 三位一体的定式」の冒頭に、Iという番号を付して配し、続いてその裏側（471ページ）を、IIという番号を付して置き、そのあとに、第6章のなかの445ページから1パラグラフをもってきて、IIIという番号を付して配置した。そして最初のIという番号に注記して、「以下の3つの断片は第6篇のための原稿のそれぞれ違った場所にあるものである」と書いている。エンゲルスは上の半切りを地代論の草稿のあいだからみつけたのであろう。彼はこの半切りを、第7章用にまとめられていたそれ以外の12枚の全紙のどれにも直接にはつながらない独立の紙片とみなし、しかも、その表裏もまたそれぞれ独立した断片とみて、第7章の12枚の全紙の——また「1）三位一体的定式」について言えば3枚の全紙——のまえに、I、II、として配したのである。そしてそれに続いて、これも第6章の草稿のなかに断片として見出される1パラグラフをIIIとして置き、この3つの断片のあとに横線を1本引いたのち、第7章用としてまとめておかれていた全紙から、第48章の続き、というよりもその本体となる部分を置いたのであった¹⁾。

エンゲルスの死後、遺された第3部第1稿のなかで、この半切りがどこにあったのかは確言できないが、しかし、モスクワ ML 研のためのフォトコピーを作成するときには、この紙片は第1稿の本文とは別のところにあった可能性が大きい。というのは、この半切りの表裏には、このフォトコピー用の番号として、UO 41 および UO 42 という数字が記されているからである。第1稿の本文のその他のページにつけられている整理記号

は UO ではなくて、NM なのである。

さらに、IISG の旧目録によれば、この半切れは、マルクスによって「第3部に属するもの」Zu Buch 3 gehöriges. と書かれた、小さい草稿を集めたものなかにはいつている。その全体は次のようになっている²⁾。A 58 (Kleine Manuskripte, vermutlich von Marx zusammengefügt in einer Mappe mit der Aufschrift:) “Zu Buch 3 gehöriges.”

a) “Notes über Malthus.”

2 S. Quer 8°. Paginierung: 70 b, 70 a.

b) “Differentialrente.”

4 S. fol. Doppelte Paginierung: 1-4, 70 a-73 a.

c) “A. Smith.—Value.”

4 S. fol. Paginierung: 1, 2. (74 a.)

“Capital—Profit. Grund u. Boden—Rente. Arbeit—Arbeitslohn. Capital—Zins. Privateigenthum. Grundeigenthum—Rente. Lohnarbeit—Arbeitslohn!”

2 S. fol. Paginierung: 470, 471.

d) Ausführungen über die Gesetze der Profitrate.

9 S. fol. Paginierung: 77-85.

e) “Die allgemeinen Gesetze der Profitrate.”

27 S. fol. Paginierung: 1-27.

f) “Beiheft A.—Zins.”

2 S. fol. Paginierung: 75. 76.

この A58 のうちの c) の後半 2 ページが、いま問題にしている半切りにあたる。見だしのうちの、Capital—Profit. Grund u. Boden—Rente. Arbeit—Arbeitslohn. は 470 ページの冒頭から、残りは 471 ページの冒頭からとったものである。いま、上の a) の „Notes über Malthus.“ と一緒にして保管されている、„Zu Buch 3 gehöriges“ と書かれた表紙をみると、その書体は後期のもの（1875 年以降の草稿にみられるもの）であっ

て、かなりあとでマルクスが自分で整理のためにいろいろのものをこの表紙のもとに集めたらしいことがわかる。ところが、この a)–f) の断片のうち、確認することができた a)d)e) の3つのものでは、 photocopy 作成のための記号はいずれも NO となっているのである。つまり、 photocopy をつくるときには、問題の半切りはこれら a)d)e) などとは一緒のところになかったのである。それはおそらく、旧目録を作るさいにこの A58 のなかに入れられたのであろう（しかし奇妙なことに、この半切り現物に記入されている旧目録整理番号は A 58 c ではなくて A 58 d となっている）。

したがって、この半切りが現在の位置に置かれたのは、旧目録が作られたのよりもあとのことだったことがわかる。

さて、この現在の位置は、結論から言うと、やっと正しい位置に置かれたのだ、と評価することができる。かつて、リュベルは彼の『資本論第2巻資料』のなかで、この半切りがエンゲルスの考えたような独立の断片ではなくて、第7章用の全紙の2枚目につながるものだ、という判断を示し³⁾、第48章（リュベルでは第25章）を独自に編成したが、そのさいにこの半切りが置かれるべき位置として彼が指定したのが、まさに現在 IISG でそれが置かれている位置なのである。

ただしこのことは、リュベルの発見によってはじめてこの半切りが正しい位置に置かれた、ということの意味するものではないように思われる。というのは、リュベルはこの紙片に 531 および 531 b のページ番号を読んでいるのであって、彼がこの草稿を調査したときには、これらの番号がすでにつけられていたこと、したがってこの紙片が当時すでに現在の位置にあったことが推測できるのである⁴⁾。じっさいこの紙片には、誰かの手によって470ページの方に 531 a、471ページに 531 b の番号がつけられている⁵⁾。この番号は、おそらく IISG の旧目録作成以降、リュベルが調査した時点までのあいだに、誰かによってつけられたものであろう。

問題の半切りは、サイズが第7章1枚目の全紙のそれと、つまり 328.5

×200.5 mm とほとんど同じだが、それよりもやや厚い紙で無罫、透かしは 26 mm 間隔の平行線となっている。この紙は第3部第1稿に用いられたどの紙とも異なるので、紙からは、これとほぼ同じ時期に書かれた箇所を推測することはできない。

この半切りが現在の位置にあるべきものだということが、したがってまた、リュベルの考証が正しいということは、次の根拠にもとづいて言うことができるように思う。

第1に、この半切りの裏側、つまり 471 (531b) ページの最後が、532 ページのはじめに続くことは、ほとんど確実である。現行版で言えば、断片Ⅱの末尾（エンゲルスはここに「ここで原稿は中断している」と書いている）は、じつは、MEW 版831ページの上方、エンゲルスの注記（「原稿ではここで1枚の2つ折り全紙がなくなっている」）のあとのところにつながるのである。現行版ではⅡの末尾は「2）」で終わっているが、草稿でそのあとに D. がある。したがってこの2ページは、„2) D. Differentialrente ist gebunden an d. relative Fruchtbarkeit d. Ländereien, also an Eigenschaften, die dem Boden als solchem zukommen (od. aus ihm entspringen).“ という1文でつながるのである。

第2に、532ページから始まる全紙の末尾と次の536ページから始まる全紙のはじめとがつながっていることは疑いない。すなわち、MEW 版835ページ下から12行目から11行目にかけての „anheimfallen“ という語のうち an- が 535ページ、heimfallen が 536ページに書かれているのである。

第3に、第7章が、したがってまたこの章の「1）三位一体的定式」が、エンゲルスが第1ページとして528ページの番号をつけたページから始まることも疑いえないところである。すなわち、このページには、まず「第7章。収入（所得）とその源泉」と書いたのち、その下に、「1）三位一体的定式。4）生産諸関係と分配諸関係。2）生産過程の分析のために。3）競争の外観。5）諸階級」⁶⁾ と、この章のプランを記し、次いで、「1）三位一体的定式」1) Die trinitarische Formel. と表題をかかげ、そのあとに

「(この部の445, 446ページ, 参照)(その箇所はここに属する。)」と書いている。そして次の行から、現行版で3つの断片のあと、横線をおいて始まる叙述が書きはじめられている。したがって、このページで始まる全紙がこの章の最初のものであることはたしかである。

第4に、いま述べたように、1)の表題のあとに、445, 446ページが第7章の1)に属することがマルクスによって明記されており、エンゲルスはこれにもとづいて445ページから1パラグラフ(現行版の断片Ⅲ)をこのなかに取り入れたのである(ただし、446ページからは取られていない)。このことは、445ページの記述が、528ページから始まる第7章の1)のどこかにつながるものではなくて、独立した断片であることを示している。

以上の4点を総合して言えば、独立の断片である445ページからの1パラグラフを除くと、第7章1)のための材料は、まず、528—531ページ的全紙、そしてそのあとに、ひとつつながりの、531 a, 531 bの半切り、532—535の全紙、536—539の全紙が来る、というものであるほかはない、ということ、つまり、現在のIISGでの草稿の順序であるほかはない、ということになるのである。

そこで、残る問題はふたつ、すなわち第1に、1枚目の全紙の終わり半切りのはじめがつながっているものかどうか、第2に、半切りの表裏はエンゲルスがIとIIとに分けたように別々の断片か、それとも表から裏につながっているとみるべきものであるか、ということである。これに答えるには、上のように並べられた素材の内容の内的関連の検討によるほかはないが、わたくしは、これらのものをすべてつながっているものとして読むことがまったく可能であると考えている。

なお、独立の断片である445ページからの1節は、リュベールはMEW版839ページの第1パラグラフの前、つまり7行目と8行目のあいだに挿入している⁷⁾が、やはり独立したものとして取扱うべきであろう。

「1)三位一体的定式」の部分を含めて、第7章の全体の内容については、別の機会に紹介したいと考えているので、ここでは第7章については

以上でとどめることにする。

- 1) *Marx-Engels Werke*, Bd. 25, S. 822-839.
- 2) 川鍋, 前掲稿, 10-11ページ, 参照。
- 3) Rubel, *Matériaux*, p. 1842.
- 4) なお, すでにみた, 第5束につけられた表紙にある記載 „Marx blz. 528-575 + pp. 531 a+b“ は, この半切りが正しく531ページのあとに挿入されたのちに書かれたものであるわけである。
- 5) リュベルは, 1425ページへの注2のなかで, 彼の独自の編成を次のように記している。草稿「529-530ページ (MEW 版, 828-831ページ); 531ページ (MEW 版, 822-824ページ); 531 b ページ (MEW 版, 824-825ページ); 532-539ページ (MEW 版, 831-839ページ)」(*Matériaux*, p. 1482)。しかし, このなかの最初の「529-530ページ」は「529-531ページ」, 次の「531ページ」は「531 a ページ」とあるべきところである。おそらく彼は, 470の番号のあるページの新しいページ番号を531 a ページではなくてただ531ページとのみ記録してしまったために, 本来の531ページ(この半切れのまえの全紙の最後のページ)の存在を見失ってしまい, このような誤りを犯すことになったのであろう。
- 6) このうちの「4)」は, なにかのうえに重ね書きをしたものである。おそらく, はじめ「2)」と書いたのであろう。そのあとの「2)」, 「3)」, 「5)」の3つの番号は, いずれもまったく訂正の手が加えられていないので, 「2)」を「4)」に訂正したのは, 「2) 生産過程の分析のために」と書くよりもまえにすでに行なわれていたものと推定できる。
- 7) Rubel, *Matériaux*, p. 1439-1440.

6 草稿全体のページ数について

最後に, 以上の調査にもとづいて, 草稿のページ数をまとめておこう¹⁾。

表紙は, マルクスによるもので現在残っているのが, 4ページの1全紙(ただし2つに切れてしまっている)と2ページの全紙半切りの2枚で, このうちマルクスがなにかを書いているのが3ページである。このほかに, マルクス, エンゲルス以外の第三者が挿入した表紙が, 半切り1枚, 全紙2枚の計10ページ, それに誰が挿入したのか不明の半切り1枚, 2ペ

ージある。

本文は、全部で147枚の全紙（2つに切れていても、当初つながっていたことが明らかなものは1枚の全紙とみなす）、うち4ページある完全な全紙が143枚（572ページ）、2ページの半切り全紙が4枚（8ページ）、合計580ページである。そのうち半切りの全紙は、第80全紙（325 a, 325 b ページ）、第88全紙（352 a, 352 b ページ）、第106全紙（417 a, 417 b ページ）、第136全紙（531 a [470], 531 b [471] ページ）、の4枚で、そのうち前半の第80全紙と第88全紙は、1枚の全紙を2分したものである。

上の580ページのうち、まったくなにも書かれていないページが3ページ（202 b ページと203ページのあいだに2ページ、528ページともうひとつの528ページとのあいだに1ページ）、ページ番号だけしかないページが8ページ（118, 139, 140, 150, 265, 266, 405, 528の各ページ）で、実質的な空白ページは合計11ページである。

ページ番号以外になにかが書かれているページは569ページあるが、このうち1ページ（340ページと341ページのあいだのページ）にはページ番号が欠けている。

したがって、ページ番号（エンゲルスや第3者によるものを含む）のあるページが576ページ、それがないページが4ページである。

他方、数字による通し番号以外の番号（重複番号を含む）をもつページ(a)は21ページ（202 a, 202 b, 283 a, 325 a, 325 b, 352 a—352 j, 417 a, 417 b, 513, 528, 531 a, 531 bの各ページ）、ページ番号のないページ(b)が4ページ、欠番(c)が20ページ（64, 65, 87, 88, 138, 141—149, 386—389, 399, 479の各ページ）である。

念のために、以上の数字にもとづいて、草稿の最終ページのページ番号である575と、全紙の総ページ数580との関係を示しておこう。

$$\text{総ページ数} = \text{最終ページ番号} + a + b - c$$

$$580 = 575 + 21 + 4 - 20$$

- 1) 佐藤氏は、フォトコピーにもとづいて草稿のページ数の計算を試みておら

れる（前掲論稿(1), 120, 121—122ページ）。そして、「マルクスによって実際に本文が書かれている総ページ数は569ページということになる」という結果を出されている。これは本文で記した「ページ番号以外になにかが書かれているページは569ページある」としたものにあたり、正しい数字であると言える。しかし、氏はオリジナルを見られなかったために、 photocopy がない空白ページその他のページの状態を調べられなかったので、空白ページその他については正しい記載をされることができず、旧目録の検討もやや不正確なものとなっている。氏の記載とわたくしの調査結果との相違は、いちいち記してみても意味がないので、省略する。

付論 第2部第4稿とその断稿とについて

本稿第3節の注24に述べたように、第2部第4稿には、それに先行する小さい断稿がある。これはエンゲルスが第2部への序文のなかでふれていないものである。この断稿と他の草稿との関係について、これまでまだ正しい把握がなされていないとみられるので、この機会に簡単にふれておきたい。

第2部の草稿について、エンゲルスは彼の序文のなかで、マルクスによって草稿番号がつけられた第1—4稿と、エンゲルスが発見して番号をつけた第5—8稿との8つの草稿を挙げている。第5稿については、「1877年3月末には、第2部の新しい書き上げの基礎として前記の4つの草稿〔第1—4稿のこと——引用者〕から指示や覚え書〔Hinweise und Notizen〕がつくられ、この書き上げのはじめのところは第5稿（2つ折り版56ページ）になっている」（MEW, Bd. 25, S. 11, 傍点—引用者）、と書かれており、この文を文字どおり読めば、第5稿以外に「指示や覚え書」があるはずである。エンゲルスが第2部用のマルクスの草稿として挙げているのは、上記8つの草稿とこの「指示や覚え書」だけである。しかし、現在残されている第2部用の草稿には、エンゲルスが言及していないものも含まれている。IISG で第2部用草稿として保存されているものなかにそれがあるだけでなく、モスクワの ML 研にも1つか2つそうし

たものがある可能性がある（「はじめに」につけた注4，参照）。ここで取り上げる断稿もそのひとつである。

IISG の新目録で「第5稿」とされているのは次のものである。

A 66 Das Kapital, Bd. II, Manuskript V: “Der Kreislaufsprozess des Kapitals”,

1877, deutsch, englisch, französisch, 44 $\frac{1}{4}$ S.

ところが、このなかには3つの、区別されるべき草稿が含まれていて、エンゲルスが「第5稿（2つ折り版56ページ）」と書いているのは、その第1のものであり、あとの2つは、明らかに第5稿ではない。奇妙なことに、旧目録ではこの3つは別のものとして取扱われ、次の記載からわかるように、第5稿が第1のものだけであることが認識されていたのである（川鍋，前掲稿，8ページ，参照）。

A 45 “Ms. V. Erster Abschnitt: Der Kreislaufsprozess des Kapitals.”

56 S. fol., S. 1-56. (von Marx paginiert).

Bemerkung von Engels: “Manuscr. V. (1875 oder später)”

A 46 Bemerkung von Engels: “Zu Ms. V. Erste Anfänge.”
“Marx”: 19 April (1877).

Zweites Buch. Der Cirkulationsprozess des Kapitals.

4 S. fol.

A 47 “Zweites Buch. Erstes Kapitel” (Ms. VI. 1)

4 S. fol.

このうち第2のA46は4ページの短いもので、しかも、前半2ページと後半2ページとがともに第2部第1篇第1章（ここではすでに第2部は3つの篇に分けられることになっている）の冒頭部分を推敲しているものである。その第1ページには、上の記載にあるように、エンゲルスが「第5稿付属。その書き出し」と書いている。2つの書き出しの表題をみても、こ

れが第5稿の執筆に近い時期に書かれたものであることがわかる。(しかしそのなかの文章は第5稿と直接比較できる部分が少なく、いまのところ、その先後関係をきめることができないでいる。)

さて、問題は、第3のA47である。この草稿そのものには、マルクスによってもエンゲルスによっても、他のなんらかの草稿との関係や執筆時点を示す記載は与えられていない。これも、4ページの短いもので、第2部の冒頭の書き出しである。しかし、その表題と書体とをみると、明らかに第5稿とは違う時期のものであることがわかる。その表題を——すでに掲げたが——繰り返すと、次のようになっている。

第2部。資本の流過程。

第1章。資本の流通。

1) 資本の諸変態。

Zweites Buch. Die Cirkulationsprozeß des Kapitals.

Erstes Kapitel. Die Cirkulation des Kapitals.

1) Die Metamorphosen des Kapitals.

第5稿ではすでに第2部は「篇 [Abschnitt]」にわけられることになっているのに、ここではまだ「章 [Kapitel]」となっている。書体も後期の第5—8稿とは明らかにちがう前期のものである。そこで他の草稿とくらべてみると、この断稿が第4稿よりもまえに書かれたものであること、そればかりか、第4稿の冒頭4ページはまさにこの断稿の清書稿となることがわかった。

しかし、そうだとすると、これがどうして新目録では、第5稿とされているA66に入れられているのであろうか。また、旧目録には上に示したように「第6稿1 [Ms. VI. 1]」と記載されているが、これはどういうことなのであろう。そのどちらも誤りであるにしても、その根拠を知りたい。そこで、IISGのランカウ氏に聞いてみた。1980年11月28日のことであった。数時間を置いて得た答は、「目録の分類は *chronologisch* なものではなくて、*analog* な視点によるものだ、完全なものでもないし、またそれ

自体が研究結果であるわけでもなくて、利用者のための便宜にすぎない、それを使って結論を出すのはあなたがただ、という苦しいもの、そしてなんら説明になっていないものであった。またそのさい、旧目録の記載が本当に „Ms. VI. 1“ となっているかどうか見せてほしいと頼むと、「旧目録はすでになくなったものと考えてほしい」と言い、その現物をみせてくれなかった（これはのちに、現物を見る機会ができ、目録にまちがいなくそのように記載されていることを確認した）。「旧目録はすでになくなったもの」というのであるが、「マルクス=エンゲルス遺稿」は、現在もお旧目録の分類番号によって保存されているようであり、旧目録にたいする彼の態度はすっきりしないものであった。ともあれ、IISG の新旧両目録での取扱いの理由は、いまのところ、目録作成のさいの研究の不十分さによるもの、とでも言うておくほかはない。

さて、上の断稿が第4稿のまえに書かれたものであることを確認しただけでそれらの解説文もつくりないうまま、第1回目の IISG 通いを終えたが、1981年の冬、モスクワに滞在したとき、ML 研で、いまのところ第2部の仕事を主としてやっているチェブレンコ氏と話す機会があった。そのさい、IISG で「第5稿」とされているもののなかに第4稿直前のものをみつけたが、と言ったところ、「いや、それは第4稿の清書稿のことではないか」と言う。手もとには表題ぐらいのメモしかなかったが、IISG では確実に先後関係をつきとめたという気がしていたので、そうではないだろうと反論し、議論になった。結局彼は、ML 研内部で彼らが利用しているフォトコピーをもちだしてきた。そして、「このとおり、断稿は第4稿の清書となっているではないか」と言う。それを見て仰天した。まちがいなくチェブレンコ氏の言うとおりののであるが、なんとよくみると、わたくしの記憶では第4稿であるものが断稿とされており、わたくしの記憶では断稿であるものが第4稿とされているのである。そのことを言うと、「いやそんな筈はない、この第4稿冒頭は次の第5ページにちゃんとつながっているのだから」という反論である。彼の言うことが正しいとすると、

IISG での両方の4ページが誤って入れかわってしまっていることになる。「もういちど IISG に行くことにしているから、そのときに確かめることにしよう」と言って、この話題を終えたのであった。

その後、ふたたび IISG に通うようになったので、もういちどフォトコピーでよく調べてみた。明らかにモスクワとは逆になっている。そこで、第2部の諸草稿のオリジナルを見せてもらったさいに、この2つの草稿を念入りに調べてみた。結論は、モスクワの方こそ、いつの時点でか、それらが入れかわってしまっているのだ、ということであった。そのことは、両者に用いられている紙のサイズと質とから確言できるのである。

IISG で第4稿 (A 43) として保存されている草稿は、 406×321 mm の全紙を2つ折りにしたフォリオを重ねて、それを同じ大きさの全紙を同じく2つ折りにした表紙でくるんだものである。第1—4ページにあたる第1全紙を含めて、すべて同じサイズ、同じ紙質の紙が使われている。透かしは 27 mm 間隔の平行線があるだけである。

それにたいして、第5稿の第3のもの(新目録で A 66 の第3のもの、旧目録で A 47) は、 421×343 mm の全紙を2つ折りにしたフォリオ1枚である。ひどく変色してふちはぼろぼろになりかかっているが、やや青みがかったクリーム色で、透かしは 28 mm 間隔の平行線である。

両者の用紙がはっきり違うものであることは、現在第4稿の第1全紙となっている全紙がまぎれもなくもともと第4稿の1部であったことを示している。しかも、かつてモスクワ ML 研のためにフォトコピーをつくったさいにつけられたとみられる例の記号は、第4稿では全ページ NT であり、断稿の方が NV である。どこからみても、IISG のオリジナルが入れ替わってしまっていると考えすることはできない。

こうして、モスクワでの入れ違いという驚くべき事実を確認したのであるが、そのさいまだ気になっていることがあった。というのは、チェレンコ氏が、このことについてすでに論文に書いているから読んでくれ、と言っていたことである。それは、モスクワ ML 研でマルィン氏(マルク

ス・エンゲルス著作部部長) から受贈した「マルクス 研究学術通報・資料」(Научные сообщения и документы по марксоведению, ИМЛ при ЦК КПСС, Москва, 1981) のなかのチェプレンコの論文「マルクス『資本論』第2部第1—4稿の執筆時期推定をめぐる諸問題について」(А. Ю. Чепуренко, *К Вопросу о датировке I—IV рукописей второй книги “Капитала” К. Маркса*) であったが、気になりながらそのままにして帰国し、先日やっと読むことができた。読んでみて、いまさながら驚いた。さきの入れちがってしまった状態のままのフォトコピーにもとづいて執筆時期の考証が行なわれていたからである。

チェプレンコは、同書の87ページから91ページにかけて、第4稿の執筆時期の考証を行なっている。それ自体には、この *quid pro quo* は影響を及ぼしていない。というのは、この2つはほとんど同じ時期に書かれたものであるうえに、第4稿は断稿の清書であって、両者の内容はきわめて近いものだからである。だが、チェプレンコはそれに続いて、「われわれにはもうひとつ、ほぼ同じ時期に書かれた第2部の下書き異稿が遺されている。すなわち「第4稿」の第1章の冒頭の仕上げ稿である」と言い、その執筆時期の考察に移っている。いうまでもなく、彼がいう「仕上げ稿」の本体は第4稿そのものであって、もし時期の考証が必要であるとすれば、彼が第4稿の一部として扱っている断稿の方であり、それは当然、第4稿の以前のいつか、ということではならなければならない。ところが彼は、91ページから94ページにかけての3ページも使っているいろと考証をしているのである。しかも、その内容をみて、またびっくりした。

わたくしは、チェプレンコの論稿を読むまでは、そしてとくに、IISGでオリジナルを見たのちには、モスクワで入れ替わっているのは第4稿の第1全紙と断稿の第1全紙とであって、第4稿にはその表紙がきちんとついているのだと思っていた。ところが、チェプレンコは、さきに続いて次のように書いているのである。

「この仕上げ稿のテキストそのものには、間接的にであろうと、その

執筆の時点を十分に正確に判定することを許すような材料はまったく存在しない。しかし、この草稿のテキストには、ページ番号のない1枚の紙葉（おそらく表紙）がつけられていて、それにはマルクスがインクで書いた、「15日か、16日か？ トゥッシーの誕生日は？」というメモと、同じく鉛筆での、「チェルヌイシェフスキーは1864年に鉱山行きの刑に処せられた。フレロフスキー」というメモとがある。」(Там же, стр. 91)

そこに書かれているメモから、じつはこの紙葉——といっても、おそらくモスクワには、その表側のフォトコピーだけがあるのである——は、第4稿の表紙であることがわかるのである。つまり、モスクワでは、第4稿の表紙のフォトコピーと、第4稿の1—4ページのフォトコピーとをあわせて、独立の断稿としてしまっているのである。しかも、チェブレンコはそのことを書いていないのであるが、第4稿のこの表紙には鉛筆で大きくIV)と書いてあり、これが、エンゲルスのいう「マルクスによる〔草稿の〕番号づけ」であることは明らかなのである。

このあと、上のメモとマルクスの2つの手紙との関連を検討して、結局このメモは時期推定には役に立たないことを確認したのち、いくつかの事情にもとづいて、この「仕上げ稿」の執筆時期を「1868年末」と推定しているのであるが、ここではもはやそれに立ち入る必要はあるまい。

以上、第3部の草稿を主題とする本稿に、付論とはいえ、第2部の草稿についてのエピソードを記したのは、本稿でみてきたような草稿の外形的な事柄が草稿の執筆時期の推定にまで大きな影響を及ぼすものであること、それはどうしてもよい瑣末事とは言えぬことを、読者諸兄姉に知っていただきたかったからである。もし、モスクワにオリジナルがあったなら、こういう quid pro quo 劇は生じなかったかもしれない。まことに、コピーはやはりどこまでもコピーでしかないのである。

(1982年9月16日)

付記——本誌第49巻第2号所載の拙稿「蓄積と拡大再生産」(『資本論』第2部第21章)の草稿について(下)の末尾に記した「1980年3月31日」の日付は、「1981年3月31日」の誤りであった。ここで訂正しておきたい。